

# ブラジルジョーク集

醍醐麻沙夫 編著



ブラジルの  
笑いは  
コーヒーの香り

# ブラジルの笑いはコーヒーの香り

## 目次

おおらかなエピキュリアン―序にかえて

昔と今と

ブラジル文化

ユーモリスト

同時代性の確認

## アマゾンのワニ

18

森の中で（一）

森の中で（二）

ベッドの下のワニ

パラシュート

小さな川

大頭

夜道のカンテラ

どこまで黒い

干天

砂の池

口の悪さ

トトのアダ名

ヒキガエル

良心的な薬局

ゴーストタウンにて

日本人の畑

洪水

もつと大きい

山上のキリスト

渡し賃

無賃乗車

チーズパンの匂い

頓智問答

奇跡の泉

どちらが払う

偏屈者

豪華なトイレ

南の国に雪が降る

供述

税収入

砂ノミ

古い館の夜

半ズボン

## いたずらっ子

44

唱和

性教育

第二次性徴

いたずらっ子

教師の嘆き

切手代

女郎の子

天才少年

命令者

不義の子

ドラキュラの家族

鍵っ子の感傷

弁論術

空地の子供たち

角の臭い

扱いにくい年頃

トンネル

高価な営み

白いハンカチ

それは無理

キャベツ畑

コウノトリ

サンタは誰？

## 美しい乳房

63

ダンスの相手	防衛
良心的な不義	二度目の妻
道の聞き方	都会の雨
行儀の悪いオーム	ピチピチした女
聖なる性	新妻の手紙
尼僧のチエ	古典的な三重奏
火星人の女	回春
白い黒人	美しい乳房
ヤブ探偵	金婚式
二十五年振りのトイレ	化粧紙
信じる夫	ペッティング
歯医者	変わったこと
客の注文	男女上位？
幸運	一言余計
すごい効き目	いきな医者
恋は七色	さすがはベテラン
不粋な相客	結婚写真
かなり幸せな男	品定め

愛の壁文字

不妊のサンダル

ちよつとした悩み

夢多き娘の日記

愛の時間

どこがいい？

窓のオーム

職業上のチエ

## 唄うオーム

102

ネコ

ニワトリがつくるパン

独立の英雄

ゴキブリの歌

老雄の知恵

CM

オームと女房

犬

愛犬の危機

バカなオーム

へび

伝書バト

それほど偉くはない

黒人女

ガチョウ

唄うオーム

猟犬

ハツカネズミ

オームの証言

馬

メンドリ

狩猟家

ネズミはネズミ

大口のカエル

会社のオーム

四角い卵

ネコ

ウシ

ジョン・デ・バロー

アリとゾウ

二頭のライオン

## 機械仕掛けの神

124

説教

水の下が問題

願い事

オナシスの昇天

悪人の善行

機械仕掛けの神

天国の穴

お袋の味

崖のふち

反政府演説

挑戦者の秘技

イヴとヘビ

独裁者の治療

警察結婚

人口の増えない町

映画館の独裁者

屑所の羊

海軍省

## リスボンの死体

ふたり乗り自転車

リスボンの死体

スープのハエ

ボロ靴

ガス室

ピアノリスト

S F 狂

ベストセラー

売上げ

大詩人

もつと悪い命中率

有罪になったポルトガル人

被害

四角い輪

母の想い出

潔癖なイギリス人

ワニの涙

ベニスに死す

東洋の神秘

テキサスの男

外貨獲得

友か敵か

流刑囚の嘆き

イギリス気質

悲しきジョーク

日本人とユダヤ人

大停電

アルプスのガイド

月ロケット

チンピラ

落ちたふたり

旅行記

サンドイッチ

洗濯機

本日開業

ピアノ

使用法

ビル建築

## 夜明けのドラキュラ

客しだい

作家のサイン

交替

親切の限度

下手な料理人

乞食

一見正常

燈台守

行商人

インテリの老後

女の足

超前衛劇

二丁のピストル

王と独裁者のちがい

自尊心

ソリドン(孤独)

どちらの家

タレント

寝起き悪い乗客

口から出まかせ

不眠症

すごいホラ

大酒飲み

誤診？

買物

血が流れる夜

ガソリン値上げ

大きな獲物

待つ・・・

女の買物

良心的な工場

酔っぱらいの会話

鉄路

ひどい酔い方

みんなが変な日

深く深く酔う

二杯の酒

夜明けのドラキュラ

渚にて

あとがき

装丁 安彦勝博

## おおらかなエピキュリアン ― 序にかえて

ブラジルには白人もいれば黒人もいる。混血児もいる。そういう現実に対してブラジル人はあまり深刻な議論はしない。たいていジョークで説明する。例えばマリオ・アンドラーデ著の『マクナイマ』ではこう書いてある。「昔、三兄弟がいた。みんな黒かった。水溜りがあつて初めの子が水を浴びたら白くなった。次の子は水が少ないので少し色ごとれて褐色になった。最後の子はもう水がなくて手と足の裏しか水をつけられなかったのだから、ただ白くなった」と。

これは現実逃避のジョークではなく、現実をあるがままに肯定し積極的に受け入れようとするジョークなのだ。つまりブラジル人のジョークは無力な者が現実を皮肉くるジョークではなくて、健康な生活者が現実を肯定して逞しく笑うジョークなのだ。そこに、二十一世紀の大国と呼ばれる希望がある、おおらかな国民性がうかがわれる。それでいてユーモアに対するセンスは驚くほどデリケートである。

この本はジョーク集なので、まずジョークを一つ。これは古いやつだ。

第二次大戦の末期、まずイタリアが手を挙げたとき、ブラジルに住むイタリア移民たちは「これでやっとイヤな戦争が終った」と喜んでお祭り騒ぎをした。

次にドイツが降伏。ドイツ人移民は店を閉じ仕事を休んで祖国の敗北を悲しんだ。

最後に日本の敗戦……。日本人移民たちは泣きながら働いていた、と。

このジョークが語られおもしろがられてから、もう三十年以上たつ。もうとつくに忘れられていい古さだ。しかし、「泣きながら働いていた」とたった十語で描写された日本人の特質は決して過去のものにはなっていない。戦後の日本の復活、そしてエコノミック・アニマルとかドルの溜め過ぎとか、日本人の働きっぷり故に生じる国際間の摩擦の報道記事を読むたびに、私の脳裡をいつもこの古いジョークがすり切れた無声映画のシーンのように横切るのだ。

終戦の日の日本人移民たちは実際にはどうだったのだろうか？ 私は多くの移民たちにそれを訊ねたが、大半の人は、「あの日は呆然自失、仕事も手につかなかった」と答えた。

してみると、現実はず「泣きながら働いて」いた訳ではないようだ。それにもかかわらずこのジョークを発明したブラジル人の目にはそう見えただ。これは人間の本質に

対する洞察力にほかならない。

この、日本人の働きかた、個人と社会との関係などは三十年後に姿をかえてこんなジョークになって蘇る。

無人島に男ふたりと女ひとりが漂着した。もちろん、男と女のことは万国共通だが、その現われかたにはお国ぶりがある。男たちがイタリア人なら……殺し合いをして生き残った男が女を愛する。

もし、フランス人ならひとりは夫、ひとりは愛人というような関係でうまくやる。イギリス人だと、紹介されるまで口を利かないから問題はない。日本人なら？……日本人はすぐトウキョウの本社にテレックスを打って、どうしたらいいか、問い合わせる。

これは日本人にはシャクなジョークだが、一面の真実を衝いていることを認めない訳にはいかないだろう。そして、このジョークと終戦時の古いジョークは、同じ根を持って、いることにも気づく。私はここで日本人論を展開するつもりはない。サンバ、コーヒー、サッカーなど表面的なことしか日本に伝わっていないブラジル人という国民、そのブラジル人たちは意外にしたたかな人間観察の目と、それを巧みに表現するユーモアを持っている国民であるといいたかったのである。

## ブラジル文化

ブラジルはポルトガル人によって発見され国家の形態をつくられ、後に独立し共和国となった。したがって、文化的にはポルトガル及びフランス、イタリアなどのラテン系言語国の直系である。

文化の影響を受けた、という場合でも、異質の文化を努力して摂取するのと、同質のものをすんなり受けつぐのでは意味あいがちがうだろう。ブラジルの場合はラテン文化をすんなりと受け入れている。ブラジルの言語はポルトガル語だが、中卒の学力があればちよつと努力すればフランス語が読める。イタリア語やスペイン語は努力しなくてもそのまま読める。

そういう国だからラテン系文化がそのまま入ってきた。ただ、地理的な遠さから生じる偏差と気候のちがい（熱帯的な暑さ）がプラスして、いつの間にかブラジル独特の文化に変容していった。

ブラジルはいまやビッグカントリー一つに成長した。一国の工業生産高が他の南米諸国の総和よりも大きいし、世界の国力ランクで比較しても日本、西独などのすぐ次にランクされている。そういう国でありながらおおらかな人情

と、アマゾンに代表される自然が残っている。その多様性がブラジルの魅力だろう。

ブラジル人の母体はポルトガル移民だが、ジョークの世界では、なぜかポルトガル人は、ちよつと足りなくて失敗ばかりすることになっている。マヌエルとジョアキンがポルトガル人の代表的な名なので、ブラジルのジョークでは話し手が声をひそめて「マヌエルが…」といい出しただけで聞き手は笑いたくてたまらなくなる。

こんなジョークを発明したのは多分イタリア移民ではないかと思うのだが、ポルトガル系の人も「ジョアキンが……」とおもしろそうに話し、わだかまりはない。現実のポルトガル人は勤勉で好人物である。ブラジルに人種差別（特に黒人関係）がないのは、ポルトガル人がこの国をつくったためである。

ブラジル人はそうやってポルトガル移民を笑うのだが、ポルトガルに行くとき小話に登場する失敗男は常にブラジル人だそうだ。いったいこれはどちらが先にいいだしたジョークなのかと、私は多くの人に訊ねてみたが、みんな大笑いするだけだった。

## ユーモリスト

ブラジル文学はエリコ・ベリッシモに代表される叙事詩的長篇を多数生みだしたが、一方ではフランスの文人的な作家を輩出し、今日でもコント形式の文学が盛んである。そのひとりのレオン エリアシャルの新作を抄訳してみよう。「雨」という題がついている（注・リオに住む氏とは電話で話し、抄訳の了解を頂いた）。

『雨は男にとって何だろう。それは大切なもの、自分自身を見つめるきっかけを与えてくれる貴重なものだ。ガラス窓に伝わる水滴をじっと眺めていると、過去の自分、将来の自分、そして、こうあらねばならぬという現在のあるべき自分と出逢う。

仕事、女房、社交、約束……そんなことを忘れて、自分の裡に這入り込んで自分を見詰めるようにと、窓の雨は誘ってくれる。そうだ。いろいろなことがあった。後悔することが多いけど……。時には勇気の足りなさ、ときには思慮の足りなさ、男はいつも後悔しながら生きているのかもしれない。

アントニオだってそのひとりだ。妻のイザベルと結婚して十年たつ。家へ帰るといつも妻と、家計だのテレビドラマだの隣人の噂話だのをして過す。しかし、雨の日は、ふつと、いつもとちがう深い内部の自分を見詰めたい、という

気になるのだった。

彼はレコードを低くかけ、パイプをくゆらしながら窓の雨滴を眺めていた。本当は何も見ず、何も聴かず、自身と向き合っていたのだった。

妻がやって来て、片手を腰にかけ、

「あなた、何を考えているの？」

と気がかりな口調で訊ねた。

「何も」

ほとんど口さえ動かさずに、彼は答えた。

「そんなはずはないわ。男がそんな表情をして考え込んで、何も考えていない筈はないわ」

不機嫌そうに口をとがらせて、妻は答を強要するように声を大きくした。

彼は答えずにレコードのボリュームをあげた。妻はレコードに負けないように大声で叫んだ。

「いったい、あんたは何を企んでいるの」

彼は黙ったまま更にボリュームをあげた。それに負けまいとする妻の叫び声。部屋いっぱいには喧噪が満ちた。堪えがたいほどの音だった……。しかし、彼はなにも聞いていなかったのだ。彼は微笑しながら静かに坐っていた。耳の奥で雨だれの音だけが響いていた。』

これは苦い味のショート・ショートということになるのだろうか。いずれにしてもこのようなコント集がたくさん出版され売れるという事実は、ブラジル人の文学上の趣味の一端をうかがうに足るだろう。

## 同時代性の確認

ジョークのことをピアーダもしくはアネドツタというのだが、ブラジル人のピアーダ好きは定評がある。ピアーダの中心をなし、最も語られるのは政治、時局に関した、できたてのホヤホヤのやつで、その流布のスピードは信じられぬほど速い。商談をするにも、まず、仕入れたばかりの時局ジョークを一つ披露するか、昨夜のプロサッカー試合の感想をいうかした後に、仕事の話をするのが普通である。それは単なる時間つぶしではなく、お互いに同時代に生きているという証明のようなものである。ホット・ジョークが通じないのは時代遅れか宇宙人ということになる。

このジョーク集では、しかし、そういうホット・ジョークは収録していない。ブラジルに住んでいないとおもしろさが伝えられないからである。ただ、一例としてあげれば、先日フィゲレード大統領がバイヤ州視察をして群集にかこまれて腕時計を紛失した出来事があった。

そのニュースの数時間後には「灰色高官の某が早速、大統領に腕時計を贈った」というジョークが流れ、新聞記者がその話を大統領にすると、大統領は笑いながら「確かに彼から貰った。五つ貰ったよ」と答えたりした。

ブラジルをごく大きっぱに分けると、北部のアマゾン、東部のセアラ、バイヤ、ベルナンブコ州。中央部のリオ、ミナス、サンパウロ州それに南部の南大河州となる。

アマゾンでは人は自然と共生している。北東部は半砂漠地帯が広がり、住人の性格は忍耐強く勝気である。中央部は経済的にはブラジルの中心である。その中でもミナス州はポルトガル時代から歴史が古いだけに保守的で浪費をつつしむので、他州の人間からはケチだと思われる。南部にくだってアルゼンチンの国境に近くなるとドイツ系やポーランド系の移民の子孫が多くなる。北欧風の家が建ちビールに黒パンだ。国内をずっと旅をするとまるで違う国のように多様である。それでいながら一つの国家として無理なく統一しているところがブラジルの特色であり、おもしろさでもある。この章では北のアマゾンからだんだん南へと地方色のあるジョークを並べてみた。

## 「アマゾンのワニ」

☆ 森の中で（一）

アマゾンのインディオのほとんどは文明社会と接触があるが、まだ未接触の部族もいて、中には人喰い人種もいるのではないかと思われる。アマゾン横断道路工事の測量技師が、森の径で大男のインディオが片手に本を持ち、片手で子供を抱いてやって来るのに出会った。

「そんな本を持ってどこへ行くのかね」

技師が声をかけると、

「学校さ」とインディオは誇らしげに答えた。

「おお、文盲がなくなることはよいことだ。わが国の進歩だ」

技師は感激して叫んだが、ちよつと眉をひそめて、

「しかし、大人が学校へ子供を送り迎えするという都会の悪しき風潮が、もうここまで流れ込んだのかねえ」と嘆いた。

インディオはいった。

「子供じゃねえ、おれが学校へ行く」

「それはもつとすばらしい！」技師は更に感激したが、ふと気になって訊ねた。

「じゃ、なぜ、子供を連れて行くのかね？」

「これはおれの弁当だ」

## ☆ 森の中で (二)

まことに都会的なインテリがなぜか原始に憧れて、アマゾンの奥深く旅行した。暫くは物珍しかったが、すぐ飽きてしまった。もの淋しい所で、道はないから自動車はおろか、空に飛行機が飛ぶ気配さえない。

小屋の前に坐っている原住民の老人に、彼はイライラしていった。

「まったく、みんなポケットとして、なんという哀れな所だ、ここは。何にも外から来ないのか！」

「外から……何がだね」

「何がって、刺激だよ。サルの鳴き声だとか夕立だとかそんなものじゃなくて、我々の人間としての生活に本質的にかわるようなそういう刺激が、外部からもたらされないのかね」

老人はニヤリと笑って答えた。

「来るさ、それは。ときどき矢が飛んでくるよ」

## ☆ ベッドの下のワニ

アマゾン人は暑さに馴れているが、それでもときどき、暑すぎる太陽に頭をやられる人がいる。例えば……ベッドの下に巨きなワニがひそんでいて寝られない、とうったえる患者、医者は精神安定剤を調合して、飲むようにいった。二週間後の再診日に患者がやって来た。

「どうですか？安眠できるようになりましたか」

「ええ。まあ、寝られるんですがねえ……。でも、やはりベッドの下にワニがいて」

医者は首をかしげて薬をもう少し強くして渡した。

次の診察日にその患者は来なかった。薬の強さを気にしていた医者は、患者の住所へ助手を見にやった。助手は戻って来て報告した。

「あの人は先日、ワニに喰われたそうです」

## ☆ パラシュート

アマゾンの上空で飛行機のエンジンの調子が悪くなった。「いいか、飛びだして十数えたら紐を引くんだ」

パラシュートを渡しながら航空士がいった。乗客たちが

教わった通りに降下して行くと、その横をひとりのインディオが落ちて行った。

「しまった！ インディオの言葉は十までなかった」

### ☆小さな川

アマゾンの反対側の南大河州の牧夫がアマゾン見物に来た。アマゾン河が自分の州の河より大きいので気に入らない。ブツブツいいながら泳いでいて溺れかけたので、現地人が助け上げた。腹の水を吐き出させると、蘇生した男は負けおしみをいった。

「なに、こんな小さな川の水くらい、全部飲もうとしていたんだ」

### ☆夜道のカンテラ

アマゾンの田舎の夜。家々はランプで街燈はないから外は鼻をつままれてもわからない真っ暗闇になる。

向うからカンテラを下げて歩いてくる男とすれちがい、ふと見ると、毎年やって来る旅のギター語りの男だった。彼は盲目なのだ。

「おや、まあ。あなたもカンテラの明りが必要のですか」

「目明きの人が私にぶつからないようにね」

## ☆大頭

バイヤ州の方では頭の上に品物を乗せて運ぶ。

学校から帰って来た子が、

「母ちゃん、ボクのことみんなが大頭、大頭ってからかうんだ」

「そんなことないよ。お前は可愛い様子をしているんだから気にしちやいけないよ」

「うん」

「市場に行って果物を買ってきておくれ。パイヤ三つとオレンジーダース。それから西瓜とメロンとマンゴーもね」

「買物籠持って行こうつと」

「そんなものいらさないよ、頭に乗っけてきな」

## ☆干天

（セアラ州が付属する北東ブラジルは雨量が少なくてサバナが続いている。カラカラに乾燥した大地で暑さにあえぎながら、ふたりのセアレNSE（セアラ州の男）が話している）

「雨が降らないかねえ」

「この様子じゃ、当分降りませんぜ、セニョール」

「一滴も、かね」

「一滴も、です。セニョール」

「でも、地平線の上に黒雲の塊が出ているじゃないか」

「あれですか。あれは南部の方へ雨を運ぶ航空便ですよ」

## ☆砂の池

セアラ州の頑固者の話。

カチンガ（乾燥した半砂漠地帯）を歩いていると右手が光っている。湖か池のように輝いていた。

「あそこは池だな」

「あれは砂だよ」

「いや、水だ。池があるんだ」

「そう見えるがちがうんだ。この辺の地理は俺の方があんたより詳しいぜ」

「いや、絶対、池だ」

「じゃ見に行こう」

近づくとも水と見えた輝きは消えて、白い砂が拡がっている。

「ほら、砂だろ」

笑いながら砂をかけると、頑固者は、

「ヒヤー、濡らさないでくれ」と逃げ回った。

## ☆口の悪さ

セアラ州の人は口が悪いので知られているが、中でもアラカチという町は酷いという話。

あの辺は混血の褐色の住人ばかりで純粹の白人はまず見かけないが、南部から白人の旅行者がドナ・マリヤ（マリヤおばさん）の宿屋に着いた。色が白くて大きくて、しかし、セアラ州の強い太陽に焼かれて赤むけになってやって来たのだ。

旅行者が部屋に入ると、マリヤ小母さんが小僧にいった。「トランクを部屋へ運びな。あの花ムコのチンチンみたいな男の部屋だよ」

## ☆トトのアダ名

これも同じアラカチの住人の口の悪さの話。トトさんが庭にヤシの木を植えたら、すぐ「ヤシのトト」というアダ名がついた。別に不名誉なアダ名ではないが、アダ名を好まないトトはそのヤシを伐った。すると「切り株のトト」というアダ名になった。トトさんは頭にきて切り株を引きぬくと「穴のトト」というアダ名がついた。それで穴をふさ

いだら、「穴ふさぎのトト」というアダ名になった。それ以後、トトはずっとそのアダ名で呼ばれているそうだ。

### ☆ヒキガエル

地方人というものは頑固なものだが、セアラ州の人間ほど頑固者はいない。セアラ州はアマゾンの横にある。サバンの続く荒蕪たる風土に住むため、忍耐強い性格になったのだ。

そんな、サバンの道での会話……。

「やあ、どうだい。今度の日曜日にお前の家に遊びに行くつもりだ」

「そんないい方をすると、神が罰するよ。おお。『もし神がお望みなら、私は貴方の家に行けるでしょう』といわないと」

「チエツ、俺はそんな持って回ったいい方はせんよ。神が望もうが望むまいが、おれは行きたい所へ行くんだ」

彼が神を冒瀆するそんな言葉を吐き終るやいなや、真っ青に晴れていた空がにわか曇り雷鳴がとどろき、黄色い稲妻が彼を撃つたとみる間に、彼はヒキガエルになってしまった。

……時がたって神の与えた懲罰期間が過ぎ、彼は再び人間

の姿に戻った。その翌日、

「やあ、日曜にお前の家に遊びに行くよ」

「おお。神がお望みなら、といいなよ」

「チエツ、神が望まなくても、おれは行くよ」

雷鳴がとどろき、稲妻が走り、彼は再びヒキガエルになった。前よりもっと長い時が過ぎ、懲罰期間がやっと終り、彼は人間になった。

「やあ、日曜にお前の家に」

「神がお望みなら行きます」

相手があわてていい足すと、その頑固者はいった。

「神が望むなら行くし、神が望まなくたっておれば沼の棧で喋ってるんだから困らんよ」

### ☆良心的な薬局

行商人が泊ったセアラ州の田舎の小さなホテルは、ベッドとダンスがあるというだけで備品は何一つないのだった。シャワーをあびようとしたが石鹸がない。受付の男は「近くの薬局で買ってくれ」といって澄ましている。仕方なく行商人が石鹸を買いに行くと、店の奥に坐っていた親父が応対した。

「お客さんが使うやつですか？」

「そうだ」

親父はしげしげと彼の顔を眺めて、

「中くらいの脂性の肌ですな。じゃ、これをお持ちください」と石鹼を選んで渡した。

細かい心遣いをする薬局だと感心しながら戻ったが、今度はヒゲソリの刃がないことに気づいた。また、薬局へ戻ると、「お客さんの使っているのはどんなタイプですか、会社名が判りませんか？」

「さあ、気をつけたことはないねえ。両刃ならなんでもいいよ」

「そうはいきませんや。それぞれ微妙にちがいますからね」  
面倒だったがホテルに戻って現物をとって来て、ようやくカミソリの刃を売ってもらった。

やっとシャワーを浴び、ヒゲもそってサツパリしたが、歯ミガキがなくなっていた。

「お客さんの歯ブラシはナイロン製ですか、動物の毛ですか。硬さは……」

「いいじゃないか、何でもいいから売ってくれよ」

「いや、お売りできません」親父は頑固に首を振った。

「私は、薬はもちろんそうですが、歯ミガキ一つにしてもお客さまに最上のものを売って、それで信用を得ているんです。ですから、いくら旅の方と申しても」

「わかった」

終りまで聞かず、行商人は狂った兎のようになって飛びだし、歯ブラシをとりて走った。

……二時間ほどたって、さっきの行商人がまた戻って来た。薬局の親父の前に大きな空カンをドカンとおいて、「見てくれ！」といった。

親父がふたを開けるとウンコが一杯詰っている。

「ワッ！ 何ですか、これは！」

親父がとがめると、行商人がいった。

「いや、ホテルにトイレット・ペーパーがないので買いに来た。これに合うやつを売ってくれ」

### ☆ゴーストタウンにて

マット・グロツソ州の、昔はゴールドラッシュで栄え、今は見る影もなくさびれている町の一つ……。

ある日、旅人が来ていった。

「死んだ町だな、ここは。おい、そのジイサン。この町が死んで随分たつのかね」

老人はジロツと旅人を見てうそぶいた。

「さあねえ、そんなにはたたんだらうて。禿鷹がこの町に迷い込んで来たのは今日が初めてだからのう」

## ☆日本人の畑

マット・グロツソ州の奥地……そこは地理学上の分類ではアマゾン地帯に入っている。郡長が地域社会開発のために農業をすすめるのだが、住人たちはちよつと手を出してすぐやめてしまう。郡長がジープで見回りに行くと日本人移民の陸稲だけが好成績で、畑一面に黄色く色づいている。「おい、ゼー君。君は恥かしくないのかね。君の畑は何ということだ。ホウキ草とウマゴヤシを栽培してるつもりかね。その上、アリや毛虫だらけ、それなのにあんたは木陰でこうやって昼寝かい……なんとすばらしい農園か、まったく」「でも郡長さん」「でも、じゃないよ。どうして隣のように働かないのか」「ここの気候は農業には向いてねえです」「とんでもない、隣の日本人の畑を見習ったらどうかね」「それですよ、隣の畑はせっかく育てたのに黄色く枯れ始めたじゃないですか」

## ☆洪水

ベルナンブコ州という所もセアラ州のとなりで半乾燥地帯のサバンナが続き、いつもカラカラに乾いているが、そ

れだけに出水すると一度に濁流が押し寄せて人や家を呑みにする。

出水で溺れて、まだ驚きのさめない顔つきのまま、ベルナンブコの男が天国の門に来た。

「聖ペドロ様、まあひどい水でした。世界が終るかと思うくらいの水で、いや水が終らないんで」

喋っていると、聖ペドロの横に座った老人が長いアゴヒゲをしきながら、

「水を見たかね？」と口をはさんだ。

男は気にもとめずに

「もし、まだ雨が降り続けばベルナンブコ州は海になりますよ。もう水だらけ」

すると老人が、

「あそこで、水を見たかね」

ちよつと気になりながらも男は喋り続ける。

「もう、山が五十もかたまつて押しよせたような水でしたよ。それがダーツと道を流して」

「水を見たかね？」

男はムツとして、

「聖ペドロ様。いったい、このジジイは誰ですか？」

「水神様だよ」

と聖ペドロは答えた。

## ☆もつと大きい

リオにあるコルコバード山頂のキリスト像は有名だが、サンパウロでもそれに負けない巨像を建てた。

「でかいなあ」

カリオカ（リオツ子）が見物に来て驚いた。

「すごいだろう」とパウリスタ（サンパウロツ子）が鼻をうごめかした。

「コルコバードのより大きいかな」

「大きいとも。除幕式するとき像の毛が一本抜け落ちて、三十人ほど怪我をしたよ」

## ☆山上のキリスト

パウリスタ（サンパウロの住人）はせかせかして、カリオカ（リオの住人）はのんびりしている、というのが定評である。

パウリスタがリオに観光に来てタクシーをやとった。

「これは博物館です」

「立派な建物だね」

「六年がかりで建築されたものです」

「サンパウロの人間なら、まあ三年でつくるな」

次に州立劇場。

「これは三年で」

「サンパウロなら一年でつくるなあ」

何を説明しても、いちいちサンパウロを引き合いに出すので運転手はいい加減、頭にきた。

「あの、山上のキリストは何年かかったね」

とってパウリスタがコルコバード山の頂上に両手を広げて立つキリスト像を指した。

「知りませんなあ。今朝はなかったが」  
と運転手は答えた。

### ☆渡し賃

田舎者がサンパウロにやって来た。その目まぐるしい都会の動きにただただ驚いていた。

大通りを横断したくても車の量とスピードに圧倒されて足がすくんでしまう。

彼は交通巡査に向う側まで連れて行ってくれと頼んだが、巡査はまともにとり合わず、

「渡し賃五クルゼーロだ」と返事した。

もつと安く渡ろうと思って若者はキョロキョロして舗道に立っていた。いいカモと思って近づいて来たのは売春婦

である。体をすりよせて、

「あたいと行かない？」

と通の向う側をアゴでしやくつた。

「幾らかね」

「百クルゼーロ」

若者はびっくりして叫んだ。

「おら、巡査と行くだ」

### ☆無賃乗車

あの、ケチのミナス州人の話の一つ。

ミナスの男が汽車で旅をしていると検札係りが回ってきました。

「キップ拝見します」

「えっ、キップ、はいここ。おや、ない。どこへ入れたかな」

暫くして、

「お客さん、あとで見ます」

その客車の検札を終えたが、まだ男はキップを探している。

「あとで来ますがね、どうしてもなかったら新しく買うか、次の駅で下車してください」

「わかりましたよ。しかし、おかしいなあ、どこへ入れたの

かなあ」

次の駅はどうやら下車せずにやり過ぎたが、どうしてもキップが出てこない。隣の乗客がふと気づいて、

「あんた、帽子にキップを挟んであるじゃないですか」

と注意すると、ミナス男は、「シー」と唇に手を当てて、「これは古キップなんだ」

### ☆チーズパンの匂い

中央ブラジルのミナス州の人間はケチで有名だ。ある村に死にかかっている老人がいた。

彼はいった。

「おお、息子よ。チーズパンの焼けるいい匂いがするな」

「うん、チーズパンだよ」

「バアさんが炊いているのだな」

「そうだよ」

「うちのバアさんはチーズパンを焼くのが誰よりも上手だからな。……ああ、それにしてもいい匂いだ。一つ、焼きたてのやつを持ってきてくれんか。食べたくなかったわい」

「うん」息子は台所へ行ったが手ぶらで戻ってきた。

「パンは……パンは、どうしたんだ」

死にかかった老人は弱々しく訊ねた。

「お通夜用だからダメだって、くれないんだ」  
と息子は答えた。

### ☆頓智問答

都会の若者がミナス州の奥地を車で通っていると、街道ぎわにボンヤリ坐っている田舎者がいた。からかってやろうと思つて車をとめると、助手席の連れがいった。

「よした方がいいぜ、この辺の連中は顔はボンヤリしているが、口の方は達者だぜ」

「なに、田舎者をへコマすくらい造作ない」  
車を降りて若者は冷かすようにいった。

「やあ、あんたの横のブタはあんたとよく似合うなあ。そのブタの名はなんていうんだい」

ミナス人はちよつと考えてから、

「〃お前〃って名さ」

意外の手強さに若者はタジタジし、通れの男は面白そうに大笑いしたが、向うに大きなブタがいるのを見て、若者は、

「それじゃ、あのブタは〃お前のおふくろ〃かい」  
と逆襲した。

ミナス人は少しもへコマず、

「いや、あれはオスブタだ。」お前のおふくろは俺が喰っちゃったよ」といった。

## ☆奇跡の泉

ミナス州に奇跡の泉があるそうなの。

盲目の男が飛び込むと、泉の向う側に出て、

「おお、見えるぞ！ 見えるぞ！」と叫ぶ。

足のなえた者も、向う側に出ると歩けるようになる。そそっかしい男が古い車イスのまま飛び込んだら、出たときは車イスが新車になっていたそうなの。

## ☆どちらが払う

ケチで、お金をベッドの下に隠す習慣のある、あのミナス州の男がふたりリオに遊びに行った。コパカバーナで泳ぎ、昼食をしたところまではよいが、食事に入ったのが超一流の「コパカバーナ・パレス・ホテル」ときた。勘定書を見て目を白黒させ、ふたりでもめていたが、「それじゃ、このプールに飛び込んで先に水面に頭を出した方が払うことにしよう」「よし」……翌日の新聞には「ふたりのミナス男、プールで溺死」という記事が小さく載っていた。

## ☆偏屈者

ミナス州の男はケチだけでなく、一風変った偏屈者。他州の男が馬に乗って旅をしていて訊ねる。

「次の町まで何時間くらいかかるかね」

「さあ、わかりませんね、セニョール」

旅人が馬にムチを当ててギャロップで進んで行くと、後から、「その速さなら、一時間くらいですぜ」

## ☆豪華なトイレ

ドイツ系住人が多いブラジルの南部の都市、ポルトアレグレにて……ふたりの行商人が飲みながら話している。

「詰らない町だな。遊びに行く面白い所もありやしない」

「どこかあるさ」

「おれはもうホテルへ帰って寝るよ」

「まあ、そういわずにもう少しつき合えよ。……そうだいま思い出したんだが、いいナイトクラブがあったんだ。そこで飲み直そう。デラックスでねえ、便所が黄金張りだったなあ」

「黄金張りのトイレだって！」

「そうなんだ。便器が黄金でできていた」

「それは豪勢だ。どこにある」

「それが、大分酔ってたから、地理をハッキリ覚えてないがねえ」

「まあ、そんなナイトクラブなら探せば判るだろう」

ふたりはフラフラと肩を組んで歩きながら、通行人に訊ねたが、誰ひとりとして知っている者はいなかった。夜も更けて、探し疲れたふたりはタクシーに乗ってホテルへ帰ることにした。

一軒のナイトクラブの前をタクシーが通った瞬間、酔っぱらいの行商人は叫んだ。

「ここだ！ この店だ。覚えがある」

ふたりはタクシーを降りた。入口に二メートル近い大男のドアマンが立っている。

「やあ、ここのクラブだね、黄金張りのトイレがあるのは」

「黄金張りのトイレですって？」

ドアマンは首をかしげた。

「そうだよ、便器が黄金でできててさあ」

ドアマンはそこまで聞くと返事をせずいきなりふたりを束にしてつかんだ。そして店の奥へ向って叫んだ。

「おい、バンドマスター。去年あんたのトロンボーンに糞をした奴をつかまえたぞ」

## ☆南の国に雪が降る

南半球では南下するほど寒い。ブラジルもアルゼンチン国境のリオ・グランデ・ド・スール（南大河州）では七月に雪が降る。

その州の小さな町で、寒い朝、下半身ハダカの老人がパジャマの上だけ着て裏庭に出ている。

「何です、ジイサン。その恰好は？」隣の人がびっくりすると、ジイサンも首をかしげて、

「わしもわからんが、バアサンがこうしろというのだ。きのう、寒さに当って首が固くなったらね」

## ☆供述

ミナス州の田舎町の裁判所で証人が供述している。

「あなたの目撃したことを、すべて、正しく話してください」

「へえ、わしは見ましたんで。わしは正直な人間です」

「瓦を運ぶためにわしは梯子に乗っ取りました。すると向いの二階の部屋の入口で男が乱暴にドア開けたんです。まあ、

さほど変だとはそのときは思わんでした」

「それから？」

「それから、部屋にいた娘さんが驚いて、立ち上がりました。男は娘さんをつかまえました」

「ふむ」

「それから男は娘さんのスカートをとりました」

「それで」

「そのほかの服もとって裸にしました」

「それで」

「彼女は全裸になりました」

「それはわかった。それからどうしたのだ」

「わかりません」

「わからん？ だってあなたは見ていたのでしょ」

「しかし、そのころにはもう梯子に二十人も乗ったので梯子がつぶれました」

## ☆ 税収入

ケチなミナス州の田舎の町で……。

「町長さん、」公園の芝生へ入ったら二十クルゼーロの罰金  
” という立札が、半額になっていますが？」

「誰も芝生に人らるので、値下げした」

## ☆砂ノミ

(砂ノミという昆虫がいる。素足で畑仕事をすると、足の爪の間に五ミリほどの砂ノミが幾匹も入って、むずがゆいのだが、夕食のあとカンテラの光でナイフを使ってそれをほじくり出すのも、ブラジルの田舎の人の素朴な愉しみの一つだ。ポロツととれると満足だが、じつくりやらないとうまくとれない)

女学生が住民の意識調査をしていた。ベルを押しした家の主人は田舎育ちである。

「一番欲しいものを三つあげてください」

ノートを片手に質問をすると、

「金と女と砂ノミだな」

と返事があった。

「金と女は、まあわかるけど、砂ノミは？」

「わかんないかねえ。足の指に砂ノミが入ってなくて、金や女があってもどこに愉しみがあるだね」

## ☆古き館の夜

若さというのは無軌道なものだった。パウロとマリオはリュック・ザックをかついであちこち無銭旅行をした。随

分と羽目もはずしたのである。あるときなど、ポルトガル植民地時代に栄えて今は淋しい地方を旅して、かつての豪華な館に老女がひとりで住んでいる、まるで物語にありそうな農場に泊めてもらったこともあった。とにかく電気もなく、夜は八時過ぎにランプが消えてしまつて天井の高い部屋にひとりずつ寝かされて、淋しさと寝つけなかつたりした。

……時が過ぎ、そろそろ中年になりかかつたふたりが再会した。学校を卒えると仕事の都合でいつしか音信不通になつていたのだった。

「じっくり話したいと思つていたんだ」

懐かしそうにパウロはいった。

「覚えてるかい。いつか泊つた老女の館のことを」

「ああ、忘れやしないよ」

マリオは答えた。

「あの晩のこと、何か隠していることがないかね」

パウロはそういつて探るようにマリオを見た。マリオはすぐ思い当つたらしく照れ臭そうな表情をしていたが、

「いわなかったかなあ」と苦笑した。

「いや」

「それじゃ、告白しよう。君も気づいたらしいし、もう昔の

ことだ。実はあの晩、老女の寝室にしのでいったんだ。それは、彼女はおばあさんだったが、色香はまだどこことなく残っていたしね。それに何とかというか、何でも経験してやろうという無鉄砲な気持が僕にあったからね」

「それで、彼女は？」

「それが、とても喜んでくれたんだ。ま、いいことしたと思っ、後味は悪くないよ」

「それだけかな」

「それだけだ」

「まだ、何か隠してないか」

パウロは目を細めてじつとマリオを見詰めた。

「えーと……アツ、そうだ。フッフ、許してくれよ。はじめに暗闇の中で彼女が”誰？ 誰なの”ととがめるように問いたから、思わず”パウロです”って君の名をいってしまったんだ」

「……………」

「な、怒らないでくれよ。昔のことは水に流してくれ」

「怒ってやしない」

とパウロはいった。

「数年前に彼女が死んだ。遺産のほとんどが僕あてに遺贈されていた」

## ☆半ズボン

都会から来た奥さんが田舎の雑貨店で、

「おたくに半ズボンありませんか？ 私用のサイズで」

と訊ねた。店の主人は、

「さあ、そんなものはないなあ」

と首をかしげてから、

「でも、なんですかい。奥さんはお尻が半分しかないんですか？」といった。

## 「いたずらっ子」

（子供たちの遊びや表情は世界共通である。アマゾンの森の中でもブラジリアのアップト群の谷間の芝生でも、子供たちは輪投げをしたり鬼ごっこをしたりする。しかし、子供たちの笑い顔を見ると、その人々が幸福か不幸か、政治がまあまあ正しく行われているかそうでないかはすぐわかる。笑いを失った子供たち、というものも哀しいことだが地球上にはまだ存在するのだ。

思春期になると、それまで天使のようだった子供たちはにわかには扱いにくくなる。ジョークの世界にもそれは反映

していて、この章でも幼ない児たちからだんだん年上の少年たちへと移る対象への、大人たちの反応が実にユーモラスに感じられる思う。最近のジョークに登場する子供たちは一様にませているのが特色だが、この章ではませているがらもその年齢にふさわしい子供っぽさを残したジョークを主に選んでみた。

## ☆唱和

その先生は人気があつて、朝、教室に入るとクラス全員が立ち上がった

「センサーイ、おはようー」

と大声で叫ぶのだった。ところが校長が他の教室のジャマになると注意したので、先生は生徒たちに、明日からは何もいわないようにといひ渡した。

落第坊主のジョンはその日欠席していたのだが、翌朝先生が入ってくると、立ち上がって大声で、

「センサーイ、クソタレー！」

といつものように叫んだ。

## ☆性教育

小学校へ通い始めたばかりの男の子が、学校から帰るなり、

「お母さん、ボクはどこから来たの？」

と首をかしげて聞いた。

いつかはそういう質問を受けるとは思っていたが、まだもう少し先のことだと安心していただけ若い母親はすっかりオロオロして、

「お父さんが教えるわ」

と行ってしまった。

会社から帰った夫は妻の話聞いて、

「今の子にはまさかコウノトリが運んできたともいえないしな。ある程度本当の事をいう必要があるな。よし、僕に任せろ」

といった。

子供を部屋に呼び、扉を閉じ、彼はおごそかな、しかし親しみをこめた声で話し始めた。

「よし、そこへ坐りなさい。君を一人前の人間として話そうじゃないか。君はもちろん、このパパとママの子だ。パパとママはお互いに好きになって結婚したのだよ。ママは花

のようなものだ。パパは蜜蜂のようにその花に入る。パパはその花に少ししるしを残す。それがママのしるしと一緒に  
なって、花の種のように愛に育てられてだんだんママの  
お腹で大きくなる。そうやってお前は育ってお腹の下の方  
から出てきたんだよ。わかるかね」

「ウン。わかるけど……」

男の子はうなずいたが、

「ボクの場合は、随分複雑なんだなあ。クラスの友達はひとり  
はサンパウロから来たし、ひとりはリオ、もうひとりな  
んか日本から来たっていつてるよ」

### ☆第二次性徴？

「ボク、オシッコしたい」

「お母ちやまがボクちゃんのチンチンつまんであげるから、  
ちゃんとするのよ」

「いやだ、おばあちゃんの方がいい」

「あら、どうして？」

「おばあちゃんの手は震えて気持ちいいもん」

## ☆いたずらっ子

女の先生が小学校の担任のクラスに入っていくと、何と！ 教壇にウンコが一山ほどしてある。先生はビックリしたが、やさしい先生だから全員を席に坐らせていった。「こんなことをしてはいけません。でも、した人は後悔しているでしょう。皆、目をつぶりましょう。私も目をつぶります。その間にいたずらをした人は自分で片づけなさい。そして、このことを皆さんは忘れましょうね」

「ハイ」

「ハイ」

全員が（先生も）目をつぶった。誰かが立ち上がるひそかな音がした。そっと歩く音、何かしている音、戻る足音。すべてが静かになり、先生は、

「さあ、皆さん。目を開けましょう」といって驚いた。

教壇には新たなウンコの山がチョココンと加わり、黒板に、「怪獣ウンコン、再び現わる」と書いてあった。

## ☆教師の嘆き

（ああ、あの厳格な、しかし可哀相な小学校教師の話をしなければならぬ。彼はひとり娘の成長にすべての望みを

かけ、その犠牲になったという。彼女の誕生と同時に母親は産褥熱をこじらせて死に、まったくの男手一つで娘を育てあげたのだから、その注いだ愛情が強すぎたとしても仕方がない。彼は貧しい教師なのに娘を一流の私立高校へ入学させた。全寮制の名門校で夏と冬の休みだけ、娘は帰ってくる)

初夏の午後、貧しい教師は帰省する娘を迎えに駅へ行った。

「やあ、お帰り」

「お父さま」

ふたりは抱き合って、それから父は優しい目で美しく成長した娘をまぶしそうに見て、

「何も変わったことはなかったかね。学校生活はどうかね」と訊ねた。

すると娘は意外にも反抗するように入った。

「お父さん。私は妊娠になったの」

おお、哀れな教師よ、父親よ……彼はショックを受け、悲しそうにいった。

「ああ、何ということだ。私はお前を一所懸命育て、全国一といわれる学校へ入れたのに。それなのに、まだ文法をまぢがえて話すなんて」

## ☆切手代

「ジョン、お使いに行つてね。この封筒を郵便局へ持って  
いって」

切手のお金を添えてお母さんが渡すと、暫くしてジョン  
はアイスクリームをなめながら戻ってきた。

「もうけちゃった。郵便局へ行ったら誰も見てないから、  
切手はらずにそつと入れてきちやった。それでアイスク  
リーム買ったの」

## ☆女郎の子

上品な奥様と十歳くらいの娘がタクシーに乗っている。  
タクシーはあまり上品でない地帯を通った。つまり売春婦  
の多い辺である。夕暮れで、男を待つ女たちがひどく投げ  
やりな態度で街路に立っている。

「お母さま、あの人たちはどうして道に立っているの？」

娘が訊ねたので母は困って、

「ああやって、会社で働いている夫の帰りを待っているんで  
すよ」

といった。

するとタクシーの運転手が、聞いちゃいられないという

風にせせら笑って、

「奥さん、上品ぶらずに本当のこと教えた方がいいよ。あいつらは淫売女で男を待っているんだよ」

といった。

奥様はカツカしたが、娘はオットリ育てられている。さして気にもせず、

「でも、あの人たちも子供がいるのでしょ」と母にいった。

「ええ、いますよ」

「あんな人の子どもは何してるのでしょ」

娘がいうと、カツカしている奥様は叫んだ。

「タクシーの運転手してるんですよ！」

### ☆天才少年

ジョン坊やが小脇に絵をかかえて幼稚園へやってきた。

その絵は坊やが昨日見ていたマンガに似ているのだが、まあそれはどうでもいいでしょう。

先生が、

「坊や、それ何の絵？」と訊ねると、ジョンは、「神様の顔だよ」と答えた。

信心深い先生はちよつと眉をひそめながら、

「でも、神様を見た人はいないのよ。それなのにどうして神様の顔がわかるの」

とさとすようにいった。

「でも、もうボクが描いたから、これからはみんな神様の顔がわかるよ」と坊やは答えた。

### ☆命令者

「父ちゃん、ピストル買って。モデルガンじゃなくて本当のやつ」

「何をいうのかね、ジョン。とんでもない」

父親はビツクリして首を振った。

「買ってよ、ねえ、買ってよう」

「バカも休み休みいいなさい」

「買ってえ」

「だめだ」

「ねえ、ピストル欲しいよう」

「うるさい。ダメといたらダメだ。この家では誰のいう事を聞かなければならないか、知ってるだろう」

「今のところは父ちゃんだよ。……だから、ピストル買って」

## ☆不義の子

汽車がゴトゴト緑のコーヒー園を走っている。ひとりの男の子が歯をくいしばって窓の外を眺め、ときどき、堪えられないように涙を流している。

他の乗客たちは見ぬふりをしていたが、何度目かに男の子が涙をこぼしたとき、たまりかねて横の乗客がいった。

「坊や、どうして泣くのだね」

「だって、お母さんに別の男の人がいることを、僕は知ったんです！」

少年は叫んだ。乗客たちはショックを受けて黙り込んで体を固くしたが、やがて、ひとりがなだめるようにいった。

「何だね、坊や。そんなこと思いつめてはいかんよ。誰だって経験することなんだ。わしのおふくろだって愛人がいたんだよ」

それを聞いて、もうひとりが大きくうなずいていった。

「そうだ、そうだ。この人のいう通りだ。私の母親だって男がいたが、私はちつとも気にしなかったなあ。思い詰めるほどのことではないよ、坊や」

「その通り！」 他の乗客も叫んだ。

「うちのお袋ときたらひとりどころかたくさん愛人がいたものなあ。しかし、あたしは全然気にしなかったよ。彼女は

彼女の人生、あたしはあたしの人生がある」

他も我れ勝ちにいった。

「私もそれをいいたいですなあ。母親には母親の人生がある  
とね。坊や、私が不幸せな人間に見えるかね？　うちなど、  
私が小さい頃から母には愛人がウヨウヨ……」

思いつめた男の子の心をほぐそうと、乗客たちは口々に  
そういった。

一番奥にひとりで坐っていた老人がポカンとして、口に  
くわえた煙草の火が消えているのも気づかずにガヤガヤを  
聞いていたが、

「やれやれ、この客車にはまともな母親から生まれた人間は  
ひとりもないらしい」

と呟いた。

### ☆ドラキユラの家族

「母ちゃん、友だちは僕のことドラキユラの子っていうん  
だ」

「気にすることはありませんよ。それより、早くスープ飲ま  
ないとかたまりますよ」

## ☆鍵っ子の感傷

ひとりのカリオカ（リオツ子）。典型的な「鍵っ子」として高層アパートに閉じ込められて育った。青年になって初めてブラジルの田舎を旅行したが、風景の美しさもさることながら、アパートの住人にはない人情のこまやかさに心を打たれた。

ある農場の近くをブラブラ散歩していると川のほとりに小さな家がある。人恋しさにコトコトと扉を叩く。

「誰かいますか？」

「ええ」と少年の返事があつた。

「君のお父さん、いる」

「僕と入れちがいに出ていった」

「じゃ、お母さんは」

「お父さんが来たとき、出ていったよ」

それを聞いて青年は自分が育った都会のアパートの孤独を思い返して、溜息をつき、

「君の家の家族もバラバラなんだねえ」

というと、中から少年の声で、

「僕の家？ ……ここは便所だよ」

## ☆弁論術

「お父さん、弁論術とはどういうこと？」

「なかなかむずかしい質問をするようになったね。よし、教えてあげよう。ここに手のきれいな人と汚い人がいて、レストランに入った。手を洗うのはどちらかね」

「それは、手の汚い人の方です」

「そうだね。では次の質問。手のきれいな人と汚い人がレストランに入った。どちらが手を洗う？」

「それは汚れた人です。もういいました」

「いや、こんどはちがう。手を洗うのはきれいな人の方だよ。何故なら手がきれいな人はいつも洗う習慣があり、手が汚い人は衛生に無頓着だろうからね……これが弁論術さ」

## ☆空地の子供たち

鉄道の終着駅の横の空地で町の子供たちがフットボールの練習をしていた。だんだん上手になってチームを結成し、試合の日に駅長があわてて駆けて来た。

「この空地を使っても構わないが、審判なしでやってくれ」

「審判がいないと試合にならないよ」

「けどなあ、審判が笛を吹くたびに汽車が一台ずつ発車しちゃうんだよ」

### ☆角の臭い

ヤキモチ焼きの女房が病気で寝ている。子供が学校から帰って来て、

「父ちゃん、焦げ臭いよ。角が燃えてるようなへんな臭いがする」

「シーツ、母ちゃんが熱だして寝てるんだ」

### ☆扱いにくい年頃

近頃、学校の風紀が乱れて困る、と校長先生は頭をかかえていた。とにかく、煙草を吸ったり、授業をサボるくらいならまだしも、セックスと暴力のTV映画そのままに少女売春だの何だの……口に出すのも恥かしい。

それで校長先生は有名な神父さんに講演をお願いして、精神活動の気高さを教え込んでもらうように頼んだ。

「肉体の快樂、たった一時間のセックスの愉しみなど、一生を神の愛に包まれて送る幸せと較べることはできません

ん」神父が話しているとニキビ面の生徒のひとりが手をあげて質問した。

「どうぞ」

「神父さん、一時間のセックスの愉しみといったけどよ」

「ええ」

「どうやったら一時間保つのか教えてくれよ」

### ☆トンネル

子供が機関車に同乗させて貰って、喜んで家に帰ってきた。

「すごいんだ、ママ。トンネルが向うの方に小さく見えるだろ。運転手はその小さなトンネルにちゃんと狙いを定めて汽車を入れるんだよ」

### ☆高価な営み

狭い一間だけの小屋に親子三人で住んでいる。今日は日曜日で夫も朝から家にいた。一所懸命働いているので、休みは一月に二日だけだった。幼いひとり息子を邪険にするというほどでもないが、たまの休日に夫婦だけで過す一刻を持ちたいという欲望がふたりにあり、そんな気

配が感染するのかひとり息子も仲間外れにされまいという感じで妙に依怙地で家に籠って遊びに出ようとしないう。そうやって一家三人、しつくりしない気分でいたが、遂に父親がいった。

「ねえジョン。外へ行って道を通る人をひとりずつ数えてごらん」

「どうして？」

「なに、父さんの考えだしたゲームなんだよ。ひとり通るたびに一クルゼーロずつあげるよ。たくさん数えたらいい小遣いになるぞ」

「うん」

息子はさして興がっている風もないが、素直にうなずいて外にでた。

「いいかい。父さんが呼ぶまで戻るんじゃないよ」

そういいながら父親は扉を閉じた。待ちかねたように妻が身をよせた。外では「ひとり、ふたり」と数えるジョンの声がする。「十人、……十二人」

暗い小屋の中ではふたりの肌にしつとりと汗がにじみ始めた。

やがてジョンが叫ぶ声がした。

「父ちゃん、もうやめた方がいいよ。向うから日曜の礼拝行列が来るんだ。父ちゃんのゲームとても高くつくよ」

## ☆白いハンカチ

思春期を迎えた中学生の教室。

心理学の時間に女教師はハンカチをヒラヒラさせて、何を連想するか生徒に訊ねた。

「別れの場面です」

「すてきね。じゃ、あなたは」

「カモメが飛んでいるところ」

「いいわね。はい、あなた」

「女です」

「えっ、女ですって。いったい、どういう連想なのかしら」

「僕は女のことしか頭にないのです」

## ☆それは無理

小学校で先生が『泥棒』という言葉の説明をしていた。

「先生が君のポケットからお金を取ったとする。そうすると先生は何と呼ばれるかね」

「ハイ、『手品師』です」

## ☆キャベツ畑

「母さん、僕はどうやって生まれたの？」

「コウノトリがくちばしにくわえて運んできたのよ」

「フーン。じゃお母さんは？」

「お母さんはキャベツ畑の中でキャベツの葉の中から生まれたのよ」

「じゃお父さんは」

「お父さんはサンタクロース様が持って来てくれたの」

「へえ。うちの家族では普通の生まれ方を誰もしなかったんだねえ」

## ☆コウノトリ

「おばあちゃん、赤ん坊はどうして生まれるの？」

孫に聞かれて、おばあちゃんはニコニコしながら答えた。「赤ちゃんはね、子供が欲しいと願う家のエントツにコウノトリが布にくるんで運んでくるのですよ」「フーン」孫は遊び仲間におばあちゃんの答えを報告した。

「どう思う？ この話」

「年寄りは無知のままに放っとけよ」

と幼い友達はいった。

## ☆サンタは誰？

貧しい家の幼い長男のジョンがサンタクロースに長い手紙を書いた。

「サンタクロース様。うちのお父さんは病気で寝ています。お母さんも体が弱いのですが、ほかの家の洗濯をして働いています。でもとてもお金が足りなくて、とても困っています。サンタクロース様、こんどプレゼントをするとき、うちにはお金をください。一万クルゼーロあったら、お父さんの病気を治せるとお母さんはいっています」

郵便配達夫はサンタクロース様という宛て名を見て、子供の無知をいとおしんだが、開封して手紙を読んですっかり同情した。

局へ帰って仲間に見せ、皆はジョンのためにお金を出し合った。配達夫たちの月給も安いのでかなり無理をしてやっと五千クルゼーロ集まった。ジョンの父親の病気を治すには半分足りないが、それが精一杯の金額だった。そしてサンタクロースよりと署名して手紙を配達した。

数日後、ポストの中に「サンタクロース様へ」というジョンの手紙があった。配達夫はそれを局へ持って行って仲間と一緒に広げた。手紙にはこう書いてあった。

「サンタクロース様。お金を送っていただいて本当にありがとうございます。お父さんもお母さんも泣いて喜んでいます。でも一つだけ残念なことがありました。サンタ様を送ってくれたお金の半分は、郵便局でごま化されたようです」

## 「美しい乳房」

（男女の仲をテーマにした小咄は、本来が都会的なセンスで語られるべきものだろう。地方の艶笑譚もあるがアウクが強くて、民話風の別のおもしろさはあってもサラリとした肌合いはない。文化的にはフランス文化の直系であり、リオにあつたポルトガル宮廷文化の伝統を強く受ついでいるリオ・デ・ジャネイロは、そういう意味ですばらしい男女のジョークを生んでいる。現在ではフランス文化の直系というよりは、むしろブラジル独特の文化を形成したと呼んでいいだろう。それは音楽でいえば、あのしやれたボサノバのようなものだ。例えばこの章に加えた「ヤブ探偵」はリオに住むレオン氏の原話なのだが、随分と気儘な訳をしたとはいえ、あの暖かい熱帯の夜風に吹かれながら、グラス片手にお喋りをするリオのパーティの雰囲気だけは伝えられたと思うのだ。出不精

で社交嫌いの人だって、この章を読めば話のおもしろさにニヤリと頬をゆるめるであろう。

### ▽ダンスの相手

ダンスパーティーの夜……女王のように振舞っている女に若造が踊りを申し込んだ。

「わたし、坊やとは踊らないの」

鼻であしらわれて、若者の捨て身の反撃、

「失礼しました。妊娠されているとは知らなかったものですから」

### ▽防備

娘の結婚式が近づいた。彼女はまだネンネだった。そういう母親というのもあまりさばけた性格でないのが普通である。

何と説明してよいものか思案の末、母親は隣家の裏庭に放し飼いになっているオンドリとメンドリの交わりを娘に見せて、まあ大体あんな風なことです、と説明した。

新婚旅行の晩、花嫁はヘルメットをかぶってベッドに入った。頭をつつかれるのはかなわないと心配したからだ。

## ▽良心的な不義

ヨーロッパ一周の団体観光旅行から帰って来た男。

「どうだった、旅行は？」

「すばらしかったよ。最初の日と同じ団体のひとりの女性と知り合ったんだ。お互いに一目惚れというやつだ。もうブーツとしてしまっただけ、その夜、気がついたら我々はベッドで抱擁していた」

「羨ましいね」

「ところが話をしているうちに、彼女は僕が知っていて、しかも尊敬している人の奥さんだとわかった。ふたりはショックと後悔で一緒に泣きだしてしまった」

「そういうこともあるんだなあ……。それで、肝心の旅行はこういう風が続いたのかね」

「だからさ、それからずっと行く先々で抱き合っては泣き、泣いては抱き合い……」

## ▽二度目の妻

「神父様、神父様。ああ、私の女房が死んだみたいなんですよ」

「えっ！」

神父は驚いて、泣いている男を見た。

「お前はパン屋のジュツカではないか」

「ええ、そうです」

「お前の女房なら六カ月前に死んで、わしが埋葬に立ち合  
い、ミサもあげたではないか。なんで半年もたった今頃、  
そんなことをいつてくるのか」

「ああ、神父様。私は再婚したことを申し上げなかつたで  
すか」

「おや再婚したのか」そそっかしい神父はいった。

「それはおめでとう」

### ▽道の聞き方

初めての町に来た男、夜風に誘われて遊蕩心が動きフ  
ラフラとさ迷い出たが、地理がわからない。向うからお  
坊さんが来る。さすがにお坊さんには岡場所を聞けない  
と思つたが、他に通行人もいないので、

「もしもし神父さん。大聖堂はどこにあるのでしょうか」  
「まっすぐに行って、右に曲つて二つ目の角を左に曲りな  
され」

「あれっ、そちらは売春区ではないですか？」とぼける  
と、「とんでもない」と坊さんはムキになる。

「売春区はまるで反対の、あの橋を渡った右側の方じゃ」「どうもありがとうございます」

### ▽都会の雨

田舎の妻が大都会へ遊びに行った。やがて夫の所へ速達が届いた。

「五百クルゼーロ至急送ってください。こちらは毎日雨ばかりです。雨具を買わないと外出できません」

夫の返事。

「すぐ帰って来い。田舎の雨の方がもっと安くつく」

### ▽行儀の悪いオーム

ちゃんとした家庭の主婦がオームを貰ったのだが、売春宿で飼われていたとは知らなかった。

オームは叫んだ。

「おやおや、呼び込みのバアさんが替わったのかい」

主婦が驚いていると、娘たちが客間に入って来た。オームはいい気になって、

「ヒューツ、新入りのネエチャンたちだよ」と怒鳴る。

主婦はカンカンになって怒った。

「いいわ。お父さんが帰って来たら、このけがらわしいオームを早速、町外れに棄てに行って貰いましょう」  
オームはびっくりしてすくんでいた。やがて父親が帰るとオームは安心して大声をだした。

「あんたが主人か。ああ助かった。この人は前の家のお客さんだものね」

### ▽ピチピチした女

ふたりのサルタンの会話。

「五十人もの後宮の女から每晚選ぶのも大儀だねえ」

「わしは全員並ばして水をぶっかけるんだ」

「ほう、どうして？」

「暫く眺めて、一番水蒸気が立っている女を選ぶのさ」

### ▽聖なる性

神父と尼僧が任地への苦しい旅を続けていた。二頭のラクダにわずかばかりの私物と自分たちが乗って砂漠を渡っていたのだった。

途中で、どんな原因があったのだろうか、ラクダが二頭とも頓死してしまった。酷暑の砂の世界にふたりだけ

になった神父と尼僧は、生き延びるために必死の努力をした。棒を探して屋根を組み、あらゆる布をかぶせてテントにした。直射日光に当たってはすぐ死んでしまう。ふたりとも僧服も脱いでかけたので生まれたままの姿になったが、仕方なかった。そうやって隊商が通るのを待つしかない。

ふたりとも異性の体など見たことがないので、きまり悪そうに、しかし不思議そうにテントの下で相手を観察した。男と女は同じ部分もあるが、ちがう部分もある。ちがう部分に興味を惹かれるのは当然で、聖職者といえど咎めるべきでない。

「そこは何ですか、姉妹よ」

神父が訊ねると、彼女はチラと目を下に走らせて、

「私の体では死んだ部分ですわ」

心からそう信じているような答えだった。

暫く、沈黙があった。

「それは何でしょうか？ 兄弟様」

こんどは彼女が訊ねた。

神父の方が性の知識はあった。尼僧の体を見てうずくものがあり、その変化が彼女の注意を惹いたのだった。

神父は、

「これは死せるものを復活させる道具です」

思わずそういつてしまってから、彼はあまりに露骨なことをいったと、ひそかに自責の念にかられたが、それを聞いて尼僧の美しい頬に微笑が浮かんだ。

「まあ、すばらしいこと」

彼女は喜びに輝いてうっとりした視線でそれを眺めていたが、手を差しのべて神父を誘った。

「早く、早く」

と彼女はいったのだった。

「えっ！」神父は歓喜にふるえながらにじり寄った。

「早く来て……」

彼女はうっとりしたまま全裸で砂漠へ走りだした。

「あの、死んだラクダを復活させましょうよ」

### ▽新妻の手紙

「お母さん、結婚してこの町に住むようになり、もう一月が過ぎようとしています。アルフレッドはとても私を愛してくれ、私は幸せなので御安心ください。でも一つだけ悩みがあります。彼は家へ帰って来るともう私を離さないのです。台所でビフテキを焼いていると私を抱きしめて……ビフテキは真っ黒。テレビを観ていると彼はうしろから忍び寄ってきて……私はボウとして何の番組な

のかわからなくなります。そんな毎日です。

でも、やはり私は幸せですから御安心ください。親愛なる娘より、愛する母へ。

追伸。途中から字が震えていますがお容赦ください」

### ▽尼僧のチエ

バイヤ州の古い修道院が夜になって門を閉じた。しかし、まだふたりの尼僧が外出先から戻っていなかった。院長は心配していた。……その頃、淋しい街並をふたりの尼は帰路を急いでいた。

年上の尼がいった。

「誰か私たちの後をつけてくるみたいね」

若い尼が振り向いて、

「変な男です。あつ、ニタツと笑った」

と青くなった。

「急ぎましょう」

「ええ」

ふたりが早足になると、後の男の足はもつと速くなった。ふたりは駆けだした。行手が二又の道になっている。「仕方ない、バラバラに逃げましょう、相手はひとりです。助かった方が修道院に救いを求めるのです」

「はい」

痴漢は若い尼僧の後を追って走っていった。年上の尼は息を切らして修道院へ駆け込んで急をつげた。年若い数人の寺男たちが頼りない動作で夜の闇へ飛びだしていった。尼僧は礼拝堂に入り、年下の尼が無事に戻れるように一心にマリヤ様に祈っていた。

ひそやかな足音に気づいて振り向くと、あの年下の尼僧が立っていた。

「まあ、助かったのね」

「はい」

彼女は晴やかにうなずいた。

「でも、どうやって？ 話してください」

「私の後を痴漢が迫ってきたのはすぐわかりました。私は一所懸命に走ったのですが、そのうちに追いつかれてしまったのです」

「おお、神よ」

「その男は私が逃げられないと知ると悪魔のように笑いましたわ」

「おお……」年上の尼は顔をおおった。

「それで私は覚悟を決めてパツと尼服のすそを腰までまくり上げてやったんです」

「まあ」

「そうしたら男はニタニタ笑いながらズボンをおろしまし  
たわ」

「ああ、神よ。そして、あなたは苦しんだのね」

「いいえ」若い尼僧は答えた。

「スカートをまくった女とズボンをおろした男と、どちら  
が速く走れると思いますか」

### ▽古典的な三重奏

（夫が寝室に入る。妻が他の男と寝ている。夫は血相変  
えてピストルを取って……というあまりにも古典的な  
シーン）

「コ、コロシてやる！」

夫がわめいて銃口を素っ裸の間男の胸に向けると、こ  
れも素っ裸の妻が髪をふりみだして（ベッドの中でも髪  
は乱れていたのだが）夫の持つピストルにしがみつく。

「あんた、やめて！ やめてよ！」と悲鳴。

「離せ！その手を離せ！ あいつを殺す」

と夫が絶叫する。

とたんに妻の態度が変わった。

「なにさ、あんた。強そうなこといって。男らしいこと普  
段は何もしないくせに。このアパートの家賃払っている

の誰よ。・・あたしじゃない。雑貨店の支払いも、電気代も薬局もみんなあたしの働きで払っているんじゃないの。あんたはどの仕事でもうまくいかなくて、まともにお金持ってきたことないわ。なにさ、あんたは男の顔をしているけど、この家で男の役割りをしているのは本当は私よ。そのピストル捨てなさい！ おとなしくしなさい」  
そうまくし立てられるうち、だんだん夫の顔が虚ろになり、しよんぼりして、ピストルを捨てると間男に向かつていった。

「あんた、何か着なさいよ。そんな恰好じゃ風邪ひきますよ」

### ▽火星人の女

火星探検から帰った男がインタビューに応じた。

「火星人の女はオツパイが背中について、お尻が前についていますよ」

「ヒヤー、変な恰好ですなあ」

「まあ、見たところは悪いですがね。ダンスの相手にはよかったなあ」

## ▽回春

ひどく激しい雨が降っていて、田舎町のホテルの入口には人影もなく、受付の男が居眠りをしていた。もう夜中に近かった。ズブ濡れの行商人が商売道具のトランクを合羽の下に包んで飛び込んできた。

「部屋がないんですがねえ」

気の毒そうに受付の男がいった。

「何とかしてくれ。もう疲れて一歩も歩けない。それに、この雨では他のホテルまで行けないよ」

行商人はまだ若い男だが、寒そうにふるえていた。

「ふたり用のダブルベッドに老人が寝てますがね。じいさんはひとり分しか払ってないから、理屈の上ではもうひとり泊められますが、しかし、相部屋どころか相ベッドですぜ」

「それでかまわない。とにかく寝られればいいんだ。今日一日歩き回って、ブツ倒れる寸前だ」

受付の男は行商人をその部屋へ案内し、男は老人の横へそつと這入り込んでたちまち寝てしまった。

三時頃……。

「おお」という老人の叫びで行商人は目覚めた。

「今だ、今だ」

「どうしたんですか？」

「お若いのに、女を探してきてくれんか。女だ！」

「落着いてくださいよ」

「これが落着けるか、女を探してくれ、お願いじゃ。今だ、今だ」

「お断りします」

若い行商人はきっぱりといった。

「断る三つの理由があります。第一に私はこの町に初めて来て西も東もわからない。第二にこんな土砂降りの夜中に、たとえ売春婦にしろ起きている筈がない。通りは真っ暗で人っ子ひとりいませんよ。第三に、さつきからあなたが興奮して握っているのは私のです」

### ▽白い黒人

ブラジルは人種のるつぼと呼ばれるほど、あらゆる人種の子孫がいる。兵役検査場で軍医が身体検査をしていた。黒人の青年が入って来て、服を脱ぐとチンチンだけが白かった。軍医は目を丸くして驚いた。

「これは不思議だな、わしはこのようなケースは初めて見たぞ。黒人で体の一部分だけ白いとはねえ」

軍医の声を聞いて青年はいった。

「僕は黒人じゃないです。炭焼きをやっています。新婚旅行から帰って、すぐ来たです」

### ▽美しい乳房

女性の患者が診察室でブラウスを脱ぎ、ブラジャーを外すと、輝くような完璧な美しさを持つ乳房が露われた。……しかし、不思議なことに美しいのは一方だけで、片方の乳房はブラジャーの支えを失うとダラーンと垂れ下り、まるで使用後のコーヒー漉しの布袋みたいなあんなにだった。

医者は他の診察が目的だったが、あまりのアンバランスに、つい乳房のことを訊ねた。

「夫が私の乳房をにぎらないと寝られないんですの。寝ていてもずっと手を放しません」

と彼女は答えた。

「さあ、それが原因とは思えませんね。実をいえば私も家内の乳房を抱いて寝るのが好きですがね。彼女は両方も同じ形を保っていますよ」

「でも、ドクターのベッドはダブルベッドでしょう。多分」

医者はうなずいた。  
彼女はいった。

「うちのベッドは二つ離れているんです」

### ▽ヤブ探偵

（下手な医者をヤブ医者というが、探偵の場合は何と呼ぶのだろうか？ 名探偵という言葉があるから、やはり「ヤブ探偵」と呼ぶのだろうか。これも、そんな探偵の物語）

夫の行動に疑問を抱いたクララ夫人は探偵の前に夫の写真を出して依頼した。

「一週間尾行してください」

それから、夫の服装を詳しく説明した。夫は紺か灰色の服しか着ないのだった。探偵は口にした葉巻を指にとり、とんと灰を落して、「まかせてください」と、いやに重々しい声で答え、急にキツと目を光らせコートのを立てると、まるで主題歌がバックで流れているような感じで彼女の前から去っていった。

三日後に中間報告があった。

「昨夜、彼はストリップショーに行きました。最前の席に

坐り最後まで熱心にみました」

「ひとりで」

「ええ、ひとりでした」

彼女は溜息をついて電話を切った。ストリップショーにいくなんて・・・やはり私に不満があるのかしら……。。

その夜、夫が帰ってくると、夕食のテーブルで彼女は『ハーレム・ノクターン』のレコードをかけた。お皿を運んでくるたびに一枚ずつ服を脱ぐ。最後にコーヒーを運んできたとき、遂に彼女は全裸になり、ナプキンを前にヒラヒラさせて体をくねらせていた。

夫はそんな妻の狂態をびっくりして、しかし、ニヤニヤしながら面白そうに眺めていた。

そのとき電話が鳴った。

全裸の彼女が受話器をとると探偵の重々しい声がした。「彼はまたストリップショーに来てますよ。紺の背広です。いま最前列に坐っています。今夜は連れと一緒にです」彼女は黙って受話器を置いた。

「誰からかね？」

と夫が訊ねた。

「まちがい電話ですわ」

そう答えてから、クララ夫人はテーブルの下に身をかがめて、泣きだした。

## ▽金婚式

銀婚式や金婚式に思い出の新婚旅行のコースを再訪する夫婦は案外と多いもので、だからそれに因む小話も多いのだが、これもその一つ。

……金婚式に夫婦が昔のホテルに泊り、例によって、ここが変わったとか変らないとかの懐旧のやりとりがあった後、昔のように小さなローソクを灯して裸で夕食をする。

「私、年甲斐もなく体がほてってきたわ」

と感激する妻に夫はブスツとしている。

「オツパイがスープ皿の中に垂れてるからだよ」

## ▽二十五年振りのトイレ

銀婚式の旅行に出た夫婦が、思い出の新婚旅行のコースを回った。ホテルでトイレに入って「フフツ」と苦笑した夫の声を聞いて、妻がいった。

「いま、思い出したわ、貴方。二十五年前にもこのトイレに入って、そうやって笑ったのよ。あのときは恥かしくて何も聞けなかったけど、いったいどうして笑ったの？」  
「いや、ねえ、オシッコをそそうしてほかにひっかけただけなんだ。ただ、前のときは正面の壁にひっかけたけど、

今度は足にかかった」

### ▽化粧紙

貧しい若者が百万長者の娘と恋をした。娘は父親に会ってくれ、とせがんだ。若者は自分の立場を考えて躊躇したが、若さの持つ大胆さが手伝い、当って砕けろという気になった。

しかし、会見は散々だった。若者の地位や収入を知って百万長者は二度と娘に寄りつかないように彼を嘲弄し侮辱した。

「なに、月給五百クルゼーロだと、アハハ。そんなのは娘のトイレット・ペーパー代にもならんじやないか」

屈辱と怒りで青黒くなった彼が部屋を飛び出すと、玄関で娘がとりすがった。

「ねえ、どうでした。お父様は何とおっしゃったの？」

ロも利けないほどアタマにきていたが、その腕を振りはらって玄関を飛び出す直前に、彼は辛うじて一言だけ、怒りを表現できた。

「この糞つたれ女！」

## ▽信じる夫

猛烈に妻を愛し、かつ信じている夫がいた。しかし、最近の妻の行動に不可解な点が多すぎる。彼はやむなく私立探偵をやとった。

二週間後に探偵が報告に来た。夫はイライラしながらいった。

「いいか、私にとってどんな辛いことでも、すべて話してくれたまえ」

「はい」

うなずくと、探偵は報告を始めた。

「あなたが出社したあと、私は向うの建物に身をひそめてお宅を見張っております。三十分後に一台の車が来て、停りました」

「まあ、道だから車など通るさ」

「ええ、そりやそうですとも。すると奥様が出て来られて、四辺を注意深く見回しました」

「道を渡るときは注意するように、普段からやかましくいってあるんだ」

「はあ……。それで奥様は道を渡って待っている車に乗られました。運転していたのは若い男です。それで私はふたりの後を自分の車をつけて、海辺のホテルに入るのを

見とどけました」

「…しかし、ホテルといってもいろいろあるから」

「ええ、そうですね」。

辛抱強く相づちをうちながら探偵は報告をつづけた。

「ところで私は部屋の見える丘へ駆けのぼって双眼鏡で覗いていました」

「・・・」

「ふたりは部屋に入り、鍵をしめ、若い男は服を脱ぎました」

「エッ！それでどうした」

「それから、ですね。奥様も服を脱ぎました」

「おお……」

さすがに顔色が変わる。

「それで奥様は裸になられて、ベッドに横たわりました」

「それから」

夫は椅子の肘をギュとつかんで青い顔で身を乗りだした。

「すると若い男がカーテンを閉めまして、何も見えなくなりました」

「それだ！」

夫は髪をかきむしってうめいた。

「カーテンなど閉めるから、私の心に疑いが生じるんだ」

## ▽ ペツティング

恋人同士が映画館に入った。暗さを利用してピッタリとくっついていた。……といつても 全然映画を観なかつた訳ではない。その証拠には、映画は喜劇だったが、あまり笑ったので ひとりが相手の手にオシッコを洩らしてしまつたくらいだ。

## ▽ 歯医者

「歯医者に行く」という妻の言葉を夫は信じられなくなつた。だって、初めは二週間に一度だったのが、そのうちに週に三回。今では毎日通っているのだから。

それで哀れな夫は悩んだ末、妻の後をつけることにした。彼女はゴミゴミした街の中を歩き、小さなビルに入り、エレベーターで登り、……夫は階段を急いで登り息を切らせて壁にピッタリ。しかし、妻は「歯科医」という看板の部屋へちゃんと入つたのでした。

ああ、それで夫はホッと安心して帰り、……妻は若い歯科医と情事を楽しみ。

### ▽変ったこと

「私は旅行するから、妻に変ったことがあつたらすぐ知らせて欲しい」

とヤキモチ焼きの夫が友人に頼んだ。

一週間後に「スグカエレ」という電報がきて、夫は飛んで帰り、まず友人に会った。

「あんたが出発した夜、薬局の若造が泊っていったよ。次の夜も、その次の夜も」

「なぜすぐ知らせないのだ」

夫は怒鳴った。

「それがね。昨夜だけ泊りに来なかつたんだ」

### ▽客の注文

『朝日楼』……その名も高い淫売宿。

「マダム、この店いちばんのモダンで、飛び切りいきのいいネエチャンを世話してくれや。ただし、ちよつとばかり気つぷのいい女じゃないとね」

と気になることをいいすててイキなアンチャンがトンと二階へ……。

マダムはジロツとその後姿を見送って、

「ミミ、行きな」

とアゴをしゃくった。(ブラジルでも源氏名はアメリカ風の名が多いのだ)

暫くしてミミが、

「なんだ、あん畜生！ あたしやあんなのイヤよ」

プンプンして降りて来た。

「ロミー、替りに行ってやりな」

マダムがアゴをしゃくる。

そのうちにロミーも、

「いやよ、あんなの……」

シクシク泣きながら降りてくる。

「困ったわねえ、じゃナナ」

ナナも駄目……ジャツキーもダメ……みんなダメ。

「うちの店としたことが、気っぷのいい女がひとりもないといわれちゃ物笑いの種だよ。仕方ない、あたしが行こう」

昔とったキネヅカで、マダムは肥った体をゆすつて二階へ行き、男の部屋へ入った。

「恥かしいけどさ、うちの店にはあんたの相手をできる女がないよ。私じゃどうかね。まだ、そうすてたもんじやないつもりだよ。……とところで、あんだ、いったい、ど

んな要求をあの娘たちにしたんだね」

男はいった。

「タダでやらせてよ」

### ▽男女上位？

地方では結婚式のパーティは花嫁の家で開くことが多い。ふたりはそこに泊るか、新婚旅行に出るかする。

そのふたりは新婚旅行に出る予定だったが、雨が降りだしたので延期して初夜を花嫁の実家で迎えることにした。ところが雨がやんだので急に出発することにし、一度あけたトラックをまた詰め直していた。

そうとは知らぬ花嫁の姉（彼女もパーティに来てそのまま泊っていた）、そつと扉に忍び寄って中の様子をうかがっている。

「どうも入らないわ。貴方上になって、強く押して」

と妹の甘ったるい声がする。

「まだダメよ。私が上になるわ」

中年女のいやらしさで、姉はニタニタしてドア越しの声を聞いていた。そのうちに、

「どうしても入らないわ。二人一緒に上になりましたよ」

という妹の声を聞いて、堪らなくなり、

「それ、あたし知らないわ。お願い、どうするのか教えて」と叫んだ。

### ▽幸運

「今日はヒヤツとしたぜ。しかし、運がよかった。助かった」

「いったい、どうしたの？」

「連れ込みホテルから女と出るところで女房とバツタリ会ったんだ。運がいいことに女房は 気づかずにそのままホテルに入っていた」

### ▽一言余計

夫「いま、家の前でパウロに会ったけど、あいつは着こなしがいいなあ」

妻「……」

カゴのオーム 「とても早く着るしね」

### ▽すごい効き目

あるご婦人が医者にいつている。

「私の夫は以前のように私を満足させてくれません」

「この薬を飲ませなさい」 医者は棚から茶色い粉の包みを出して渡しながらいった。

「夕食の前に水か茶に混ぜて飲ませること。ただし、強い薬ですから分量をまちがえないように。あとで報告に来てください」

数日後にその婦人が再びやって来た。

「どうでした、効果は……」

「ええ、とても効くには効いたのですが」

「それで？」

「私、分量をまちがえまして、たくさん飲ませすぎました」

「フム」

「それで、うちの人はベッドに行くのも待ちきれず、夕食のテーブルで私を押し倒して……」

「ほう、凄いですなあ。いいじゃないですか、それも」

「それから夕食を済ませますと、またテーブルの上で」

「大変なものですなあ。しかし、奥さんも溝足されたでしょう」

「ええ、満足はしましたが。もう二度と行けませんわ、あのレストランには」

▽いきな医者

「ねえ先生、わたしはこの通り髪が黒いのに、女房が赤毛の赤ん坊を生んだんです」

そういいながら哀れな夫は解決を求めるように医者を見た。

「奥さんの髪が赤いのではないかね」

「いや、彼女の髪も黒いんです」

医者はちよつとむずかしい顔になったが、職業的な態度で質問を始めた。

「あなたのセックスは毎日ですか」

「いや、とても」

「では一週一度くらい」

「そこまでもいきません」

「まさか、一月に一度というのではないでしょう」

「それが……もつと少ないです」

「一年に一度？ まあ、これは冗談だが」

「いや、その、一年に一度くらいです、本当に。何しろ仕事が忙しすぎて、帰るともうクタクタで寝るだけの毎日が続いて……それで女房が浮気したんじゃないかと、今になって後悔したりするんですが」

「奥さんのせいではありませんよ、安心なさい。錆がで

たんですよ、貴方の錯が」

### ▽恋は七色

電気技師の一人娘が恋愛を始めた。若者が訪ねてきて、部屋でいつまでも話し込んだりする。親が覗きに行くと娘にうるさがられるので遠慮しているが、心配で仕方ない。それでお手のものの電気装置をつくった。

「いいかね、相手が手に触ったら最初のボタンを押す。したら母さんの部屋に緑の電球が点る。腕に触ったら次のボタンで青い色……とまあ、こんな訳で母さんもいち覗きに行かなくても安心していられるからね」 技師はそう娘にいいきかせた。

夜になって恋人が遊びに来た。

「どうだね」

「緑の電気がついたわ」

「まあ、そのくらいならかまわないさ」

「青い電気がついたわ」

「フーン、ちよつと心配だな」

そのうちに妻は何もいわなくなった。

「どうしたんだい」と声をかけると、うっとりした妻の声

が返ってきた。

「来てごらんなさいよ、あなた。まあ、きれい。蛇の色になったわ」

### ▽さすがはベテラン

デパートでは新入店員を集めて、売上げナンバーワンのベテランの仕事振りを隠しカメラで観ている。ベテランはひとりの客を釣具売場に案内して、「これは日本製のギジです。まあ、三つくらいあった方がよろしいです」「フム、フム」

客はすすめられた釣具を一揃い買った。ベテラン店員は、「でも、お客さま。お客さまのような活動的なタイプの方は潜水も楽しむべきだと存じますね。まあ、ちよつと着てみてください」

ゴムのウェット・スーツを着せて、

「ほら、私が想像した通りです。まるでジェームズ・ボンドばかりですよ。まったく」  
「フフ、そうでもないがね」

客はまんざらでもなさそうに笑って、「じゃ、これも貰っておこうか」という。

何だかんだとすすめられて、客はモーターボートまで

買って店を出ていった。新入店員たちはその実況を見守って、フーツと溜息をついた。やがて、今までテレビに映っていた当のベテランが講習会場に入ってきた。

「いったい、どうして、あんなに客の購買意欲をそそることができのですか？」

そういう質問が集中した。ベテラン店員は、

「いや、あのお客は初め、奥さんに頼まれて生理用品、あの脱脂綿のやつね、あれを買いに入ってきたのです」といった。

新入店員たちはますます驚いて、

「それが、どうして釣具や潜水具やボートまで買ったんですか！」と叫んだ。

ベテラン店員はニヤツと笑って、

「簡単な暗示ですよ。今日は金曜日でしょ。私は『それでは、退屈な週末になりますね』といたただけです」

### ▽不粋な相客

汽車の座席でふたりの恋人たち。

男「ボク、頭痛がする」

女「わたしが治してあげるわ。(チュツとキスして)どう、治ったでしょう」

男「（ニコニコして）うん、すぐ治っちゃった」

すると前の席の汚らしい老人が感心したように目を丸くして、

「ほう、あんたは聖女のような唇を持つとるですな。わしの痔も治してもらえんかのう」

### ▽結婚写真

「アレッ、この写真変ってるなあ。普通、結婚式の記念写真というと、女が坐って男がその横に立ってるものなのにねえ。あんたのは反対じゃないの」

「それがね、式ときは写真屋へ行くヒマがなくて、新婚旅行から帰って来てすぐ写しに行ったんだ。女房は坐れなくて、おれはもう立ってられなくて……」

### ▽かなり幸せな男

その若者は人一倍、感激するたちだった。新婚旅行に出かけて初夜を迎え、横でスヤスヤと寝ている新妻の横顔をいつまでもいとしそうに眺めていたが、心に湧き上がる感激を誰かに無性に告げたくなった。もう夜中でホテルは静まっていたが、心の思いをいいたくて居ても

立ってもいられなくなった彼は、ベッドを降りて部屋を脱げだした。

隣りのドアをコツコツと辛抱づよく叩く。内の泊り客がやっと起きて寝惚けながらドアを開けた。

「何だい」

「あなたは結婚してますか」

「独身だよ！」

ボタンとドアが閉まった。

若者は次の扉を叩いた。随分たつて不機嫌な顔がのぞく。

「結婚してますか？」

「いや。いったい何だ、失礼な」

荒々しくドアが閉まる。

幸せな若者はすこしもひるまずに、次々にドアを叩いた。

「ああ、結婚してるよ」

という返事を得たのは、もうかれこれ午前四時頃だった。

「結婚してるが、それがどうしたかね」

といぶかしそうな相手に、若者は両手を膝の間に組み、顔より大きな微笑を浮かべ、肩をくねらせていった。

「結婚するってすばらしいことですねえ」

## ▽品定め

ふたりの男がバーの窓から道行く女の品定め。

「どうだい、あの女のみつともないこと……。まあ、向うから金を積んできても、あんな女とは寝たくないねえ」

「あれは俺の女房だぜ」

「えっ。寝るよ、寝るよ」

## ▽愛の壁文字

娘が年頃になって恋愛を始める。親がヤキモキする……。というのも小話の一つのパターンだが、これはその中でもかなり傑作！（と話す本人がいつとります）

父親が帰って来て、

「母さんや、娘の恋人が家の壁に“アイシテル”って字を書いたぞ」

「それがどうかしましたか？」

「落着いている場合じゃないよ。どうしましたか、なんて！ 小便で字をかいたんだよ、小便で。けしからんじゃないか」

「まあ、ホホホ。あなただっけ私が娘の頃、散々同じこと

を家の壁にしたじやありませんか。許してあげなさいよ」  
「それが、だな。……娘の筆跡なんだ！」

### ▽不妊のサンダル

田舎の町の夫婦がもうこれ以上子供が生まれては困るので医者にご相談に行った。まだピルは普及してなかったし、アメリカ人のプロテストントの御婦人方が婦人の知識向上にブラジル中を歩いたりもしていなかった。

医者は金のかからぬ避妊法を教えてくれた。

「いいですか、荒物屋に行つて新品のサンダルを買つて、奥さんはそれを履いて寝なさい。そうすれば子供はできません。寝てる間、脱いではいけませんよ」

その通りにしたのだが、一カ月後に妊娠してしまった。また医者へ行くと、

「おかしいねえ。ま、そのサンダルを見せてください」  
奥さん（今は妊婦）がバッグからサンダルを出すと、一目見て医者は顔をしかめた。

「どうして注意を守らないんですか。新品の対のサンダルを結んであった紐をほどいてはいかんといいたでしょう」

## ▽ちよつとした悩み

「先生、実は……その……とても恥かしいんですが、その、非常な悩みがあつて……」

医者はすぐ見当をつけて、青年の患者をリラックスさせた。

「セックスのことですね。いってください」

「その……私のは、大きさが、五歳の男の子くらいで」

「このくらいですか」

医者は指先で大体の長さを示した。

「いいえ」

患者は首を振って、床からの目測で五歳の男の子の背丈を示した。

## ▽夢多き娘の日記

人生を真剣に思いつめる年頃の娘が、憧れのヨーロッパ留学に船便で出発した。その日記。

月曜日。

今日は船長から昼食に招待された。おお、神よ、なんてすばらしい出会いでしよう。彼はハンサムなイタリア

人で、目が大きく、内気で、まだ若いのに船長なんですもの。海の男らしくあっさりして、好感のもてる男性です。

火曜日。

午前中、ずっと上甲板や操舵室で過した。乗組員の設備も見学した。乗組員用の小さなプールもあって、そこで日光浴をした。船長はずっと私と一緒に、お仕事のことが心配になったくらい、私だけに気を使ってくれる。

水曜日。

プールで私を見る船長の目付きが、どうも昨日とはちがう感じがして、居心地が悪かった。

木曜日。

船長は私に恥ずべき要求をした。ああ、幻滅！ 男なんてみんな同じなのね。崇高な男らしさなんて、これっぽっちもありはしない。

金曜日。

おお、私はどうしたらいいの？ 船長はすっかりヤケになって、私がいふことをきかないと船を沈めると怒鳴っています。

土曜日。

今日は心が安らいでいます。私が五百人の人命を救ったのですもの。

## ▽愛の時間

マダムがペットの愛犬を連れて街を散歩していたが、飾り窓を眺めていてふと振り向くと、さあ大変！ 汚い駄犬のオスがペットに乗りかかっている。シツシツと追つたが、もう離れなくなっていた。マダムは顔を真っ赤にしてオロオロしていたが、ちょうど、顔見知りの職人が通りかかった。

「まあよかった。この手綱を五分間だけ持ってくださらない」

「いいですよ」

職人は手綱を受けとりながら大声でいった。

「しかし、マダム。これは五分じゃ終らんですぜ」

▽どこがいい？

お互いに古いつき合いで気心は知れてるはずなのだが……。

「あんたはオツパイが腹まで垂れている女が好きかね」

「とんでもない」

「じゃ、口臭のある女は？」

「いやだねえ」

「寝起きの顔が、こう、顔が脹れて目がひっちやげて、唇がダラツと下がって、というのはどうだ」

「とんでもない。そんな女は好かんよ」

「じゃ、俺の女房とイチヤつくのはよしたらどうだ」

### ▽窓のオーム

窓のオームが寢室から月光の中に洩れてくる会話を聞いてしまった。

「ええ、いいわ、はい」

「誰からの電話だい」

「夫からよ。あなたと会っているから今夜は遅くなるって、フッフ」

### ▽職業上のチエ

何不自由ない金持の若者……のはずだが、たった一つの持病があつて、頭が割れるほど痛くなるのだった。それが睾丸からくる痛みだということとは本人も自覚していた。薬ではどうにも治らないので、さんざん悩んだ末、切開手術をうけて睾丸を切りとってしまった。

もう、男であつて男ではない。頭痛は消えたが、うつ

うつと楽しまない若者は詩にもうたわれているように、新しいスーツをつくって気ままな旅にでようと思った。

上手で評判の洋服屋へ行って寸法をとってもらった。

「あんたのブリーフは三八番だね」

「三六番です」

「三八だろう」

「三六です」

「それでもはけないことはないけどね。でもそんなきついのははいていると、畢丸が押されていてまに酷い頭痛がするようになるよ」

と洋服屋はいった。

## 「唄うオーム」

「アマゾンのワニ」でもそうだが、ブラジルのジョークの特徴の一つは、動物が登場するのが多いことだろう。それだけに豊かな自然があり、人と動物の交渉が多いのだ。地方へ行くとニワトリは放し飼いだし、都会ですら、オームは家族同様になっている。田舎の子たちは一羽のオームを肩にとまらせ一日中遊んでいたりする。そんな

わけで、ニワトリとオームのジョークだけで何冊もの本ができるくらいたくさんあるが、生活に深くかかわっているだけに、その生活を知らないとおもしろ味が感じられないジョークが多いのが残念である。

気候が合っているからだろう、オーム達は一メートルくらいの大きな種類から十五センチくらいのもので、世話らしい世話をしなくてもヒマワリの種など与えておけば勝手に育つ。家族と共に暮らし、年老いるのである。早起きの家のオームは早起きだし、夜更しの家のオームは朝寝坊だ。家の気風や喋り方まで染って、可愛いものである。

### ▽ネコ

その家のネコはいらだっていた。

「うちの、ネコはちつともネズミをとらないわ、捨てて行ってよ」

「まあ、もう二、三日様子を見よう」

という夫婦の会話を聞いたからだ。

この居心地のよい家を追い出されたら、行先は闇だ。野良ネコに落ちぶれるしかない。

ネコは、ネズミの穴の前でじつとチャンスをつかがつ

ていたが、ネズミも気配を察して要心して穴から出ない。  
ネコは一計を案じて、

「ワン、ワン」

犬がいれば猫は近くにはいない。ネズミは安心して出て来たが、その瞬間、ネコの鋭い爪に首根つ子を押しえられた。

「汚いぞ、汚いぞ」

ネズミは泣きながら抗議した。

「ネコのくせに犬の鳴き声を使うなんて」

ネコは答えた。

「今日びはな、外国語の一つも喋れないとやっていかれんのだ」

### △ニワトリがつくるパン

小型だが働きもののニワトリの種類がいる。そのニワトリが小麦の粒を見つけた。

「これを蒔いてパンをつくろうよ。皆、手伝ってくれないか」

ウシもブタもアヒルもガチョウも何だかんだといって手伝わない。ニワトリはひとりで種を蒔いた。やがて小麦は黄色く色づいたが、誰も収穫を手伝おうとはしない。

……ずっと同じこと、ひとりでモミをとり、パンを焼き  
……。  
するとどうだろう。皆が押しかけて来て争って分け前  
を多目、多目に分捕ってしまう。

ニワトリが抗議のプラカードをかかげてデモをしてい  
ると役人が来ていった。

「そんなことをしてはいかん。それは君、労働者は当然自  
分の収入を得ることができが、失業者たちにも生産物  
を分配するように法では規定されているからね」  
それ以来、ニワトリは二度とパンを焼かなくなった。

### △独立の英雄

風変りな生化学者がコツコツと研究に没頭して、大変  
な薬品を合成した。それを塗るとすべての物が生命を得  
る薬だった。彼はそれを早速、公園の中央に立つ銅像に  
塗りつけてみた。独立の英雄の像で、化学者が尊敬して  
いる人物である。

実験は成功して、独立の英雄は動きだしヒラリと台座  
から飛びおりた。

……ところが生を得た彼は今までの沈着な表情とは  
うって違って、苦虫をかみつぶしたようなヘンな表情で

額や髪をこすると、狂人さながら腰のサーベルを抜いて振り回し始めたではないか。生化学者は驚いて叫んだ。

「何をなされるー」

怒り狂った英雄は答えた。

「畜生！ この広場のハトを皆殺しにしてやる。糞つたれ奴が！」

### △ゴキブリの歌

その男はいつも飲みにくるのだが、必ず小箱を大事そうに抱いているので、バーの主人は不思議に思っ「一杯おごるから中を見せてくれ」と頼んだ。

男が小箱を開けると、なんと！ ノミが歌い、ゴキブリがピアノを弾いているではないか。すばらしい、小さなショー。バーの主人は感心しながらノミの歌を聞いた。そうやって日が過ぎたが、ある日、主人は小箱の持主に頼んだ。

「ふつうじゃ、とてもこんなことは不可能だ。何か仕掛けがあるのでしょうか。教えてくれれば最上の酒を一ダースあげます」

小箱の男は思案していたが、もともと酒好きなので、秘密を喋った。

「本当はノミが唄ってるんじゃないです。ゴキブリがピアノを弾いて唄ってるんです」

「……………」

### △老雄の知恵

田舎の農場ではニワトリを放し飼いにしている。二十羽ほどのメンドリと一羽のオンドリが勝手にその辺でエサをあさる牧歌的な風景である。が、オンドリの身になると、自己の立場を守り通すのもなかなか大変なのだ。今日も作男が町から一羽の若いオンドリを買ってきて、群の中へ投げ込んで行ってしまった。

若いオンドリは落着きが戻ると、これから自分のものになるハレムを満足そうに見回した。どのメンドリもピチピチと尻がふくらんでいる。すみの方に一羽のオンドリがいてこちらをうかがっているが、かなりの老いぼれで羽の色も悪く一蹴りで打ち倒せる相手だった。

そんな老いぼれなど若いオンドリにとっては、まるで眼中にない。しかし、チョロチョロと盗み見る老オンドリの目が気になった。若ドリは闘うきっかけを待っていた。

「お若いの」

老いたオンドリが小さな声で呼びかけた。

「何だい」

「ちと相談がある」

老いたオンドリはメンドリたちの群から離れると、こ  
ういった。

「わしはもう年だ。あんたにはかなわん。闘う前からわか  
り切ったことだ」

「まあ、そうだろ」

と答えたが、そう下手に出られると若いオンドリもま  
んざら悪い気もしない。

「それで、じゃ。わしは引退するよ。しかし今までのわし  
の立場もあるからな、ただあんたに恐れをなして引っ込  
んだのではしまりがつかん。一応、正々堂々と力を較べ  
てわしが負けたということにしてくれ」

「どうすりゃいいんだね、じいさん」

「蹴り合いなどしたくないんじゃないじゃ、怪我をするからな。そ  
れで、ここからあのニワトリ小屋まで競走しようじゃな  
いか」

「それであんたの面子が保てるなら、お安いご用だ。ただ  
し、この競走が終わったらメンドリはおれのものだからな」

若ドリはそういつて、いきなり走りだした。その後を  
老いたオンドリが羽を拡げて追って行く。

ターン！

鉄砲の音が母屋の窓から響き、若ドリはバタツと倒れた。二、三回羽をバタつかせたがすぐ動かなくなってしまうた。

「あれは今晚のスープにしろ」

鉄砲を壁にもどしながら農場主は作男にいいつけた。

「今年になって五羽も若いオンドリを買ってきたが、どいつもこいつも臆病ばかりだ。古ドリに追われて逃げ回っているだけじゃないか」

## △CM

「ブラジルの養鶏のドキュメンタリー映画をつくってるんだが、観客動員力のある題名がほしいねえ」

「〃ハダカのメンドリたち〃ってのはどうです」

## △オームと女房

誰が男の気持を理解できようか、まったく。隣の男はオームと女房を追い出したのだが、

その理由は「このオームは喋らないから、女房はお喋りだから」だって。

## △犬

ベルが鳴って扉を開けた主人が驚いたのは、久り振りの旧友がそこに立っているだけではなく、凄く強そうな、しかもいたずらそうな犬と一緒にだったからだ。ふたりが肩を抱き合って挨拶している間に、早くも犬は家に飛び込んで台所の方でひどい音がした。

客間に坐ると犬が戻って来てふたりのズボンを喚ぎ回り、尾で紅茶茶碗を叩き落す始末……しかし、客はモジモジして犬をしかろうとはしなかった。主人の方はなおさらのこと、何もいえない。犬があまりうるさいので客は上の空で一通りの世間話をトンチンカンにして、別れの挨拶もそこそこに立ち上がった。

「おや、あなたの犬を連れて行ってくださいよ」

逃げるように扉を出た客の後姿に向かって、主人は精一杯の憤慨をこめてそういった。

「私の犬ですって！」

客は驚いて振りかえった。

「お宅の前でこの犬と一緒にになったのです。私はまた、てつきりお宅の犬かと……」

## △愛犬の危機

マダムは小さなメス犬を育てていた。毎朝散歩に連れだすのはお手伝いさんの役だったが、メス犬がだんだん育つと、近所のオス犬どもが放っておかない。彼女がいてもうるさくつきまとうようになった。

それでマダムは一計を案じて、脱脂綿にひたしたガソリンを散歩のときにメスのお尻に塗るようになり、お手伝いさんに命じた。これは効果百パーセントでオス共が寄って来て尻のにおいを嗅いでも、びっくりして離れてしまう。

ところがある朝、彼女が道から叫んだ。

「奥様、ノラ犬どもが、アア」

「どうしたんですか！」

「石油危機でガソリンが切れたものですから」

## △バカなオーム

物覚えの悪いオームがいて、「誰？」という言葉しか喋れない。集金人が来て呼鈴を押した。

「誰？」

ドアの中からオームはいう

「集金人です」

「誰？」

「集金人です」

延々とつづいて、疲労のあまり集金人は玄関に倒れてしまった。

女主人が帰って来て、

「あら！ 誰かしら？」

オーム「集金人です」

(やっともう一つ覚ええましたね、オーム君)

### △へビ

へビは正直のシンボルです。……だって、(後足で砂をかける)とか(へ揚げにする)とか(馬脚をあらわす)とか、そういうこととしたことないものね。

### △伝書バト

動物学者が興奮して叫んだ。

「ついに成功！ 凄い発明だぞ、これは。伝書バトとキツツキの混血種だ。手紙を届けるだけでなく扉も叩くのだ」

### △それほど偉くはない

「わあ、驚いた！犬が将棋を指すなんて。すばらしいですなあ。よくここまで仕込みましたなあ」

「なに、大したことはない。さつきから俺は金や飛車をくれてやるんだが、奴はまだ勝てない」

### △黒人女

（ブラジルを発見したポルトガル人はドレイを輸入し農場を拓き、黒人女をはべらして生活した。黒人女は混血児をどんどん生んだ。農場主たちの生活は放逸だったが、その生活態度が基調となって世界でも珍しい「人種混淆の国」が誕生したのだから、彼らの道徳的退廃も歴史の一コマとなった。ただし、そのために、今日でもポルトガル系の農場主と黒人女のとりあわせはジョークの種にされる。そういうのを一つ）

……農場主がオンドリを買ってきて、放し飼いにしているメンドリの群に放した。新しいオンドリは精力絶倫とどうか助平というか、一秒の休みもなくメンドリを追い

回している。

農場主は呆れて、

「こいつは長持ちせんぞ」

と呟いた。

はたして数日後、オンドリは畠の中にバツタと倒れて、  
頭上には早くもカラスが舞い始めている。

「やれやれ、だからいわんこつちやない」

農場主はボヤキながらオンドリの死体を片づけようと  
近づいていくと、オンドリが片目をあけて、

「シーツ」

と制した。

「おやおや、生きてたのか、いったい何の真似だ」

オンドリは頭上のカラスをちらっと見て、

「黒い女が欲しくてね」

### △ガチョウ

ガチョウの会話。

「どうして人間は俺たちのことを、”内容のない騒々しさ”  
の代名詞に使うのだろう」

「それは、人間が俺たちの羽ペンで本を書くからだよ」

## △唄うオーム

サーカスの団長の所へ、ある男がオームを売りに来た。

「凄いですよ、これは。人気沸騰まちがいなしって掘出し物です。とにかく歌を唄うんですからねえ」

「唄うオームってのはそれほど珍しくないよ、君。私も商売柄そんなオームはゴマンと知ってる。いったい、どんな歌を唄うのかね」

と団長は冷やかに訊ねた。

「それがですねえ、このオームは自分で作詩作曲したのを唄うんですよ。個性あふれるシンガーソングライターですぜ」

## △猟犬

二匹の猟犬の会話。

「もう、いやになるなあ。今日一日牧場を走り回されて主人は一匹のウズラも射でないし、ボクのお尻には散弾が二発当って痛くて仕様がな」

「こんどはウズラと一緒に走るんだね。そうしたら弾は当たらないよ」

## △ハツカネズミ

研究が各分野で進んだので生物学者も新しい研究テーマに苦勞しているのです。

「おお、遂に実験が成功したぞ！」

ハツカネズミのかごの前でパツとしない教授が叫んだ。弟子たちが集まってきた。教授は自慢そうに説明した。「わしがかごを覗くと、ネズミがパン切れを差し出すようになったのだ」

## △オームの証言

「うちの女主人が煙草を吸うようになったのは、あの日、旦那が突然帰って来て灰皿に火がついた煙草を見てビツクリしたときからです。ハイ」

## △馬

メスの三歳馬の競走……ゴール寸前で並んで走っていた一団のうち、一頭が急に遅くなった。

「おい、どうしたんだ！」

騎手が悲鳴をあげると馬は答えた。

「ゴールの写真判定に鼻だけが写るなんていやよ。あたし、横顔に自信あるの」

### △メンドリ

メンドリがオンドリに追われていた。どういふものかメンドリはけたたましく鳴き、派手に逃げ回る。裏庭から台所へ、台所から表通りと走り回ったメンドリは哀れにも自動車にひかれてしまった。

それを窓から眺めていたオールドミスがうなずきながら呟いた。

「そうなの。犯されるより死を選ぶのよ」

### △狩猟家

狩猟家がアマゾンの深い森に分け入って獲物を求めていた。一方、大きなオンサ（アメリカカヒョウ）は獲物を探して森をウロついていた。その、一匹とひとりがパツタリ正面から出会った。

「君は何してんのかねえ」

オンサが訊ねた。狩猟家はクソ度胸をきめていった。

「おれかい。おれはすっぽりとおれの体を包むような暖か

い毛皮を探しているのさ。……お前は？」

「もう五日も何も喰ってないから、食い物を探してるんだ」

…一時間後、一匹とひとりの望みは共になえられていた。つまり、猟狩家は黄色い毛皮にすっぽりと包まれ、オンサはお腹が一杯。

### △ネズミはネズミ

ネズミはネコが怖くて仕方ない。ビクビクしながら生きていた。魔法使いと知り合ったので、いつそのことネコになりたいと頼んだ。

願いがかなって、ネコになって、これで安心と寝そべっていたが、ある危険を本能的に感じてビクツとして飛び上がり夢中で木に駆け登った。体中の毛が逆立ってフーツと唸っている。

下には犬がいた。

ネコになると犬がこれほど恐ろしいものだと言ってネズミはおちおちできない。

そんなような訳で、ネズミは魔法使いに「イヌにしてくれ」「オオカミにしてくれ」と次々に頼み、最後はライオンになったが、現代のライオンは動物園かサーカスしか

生きる場所はない。

客が帰った薄暗いサーカス小屋のおりの中で、ライオンは現われた魔法使いに向かって、「やはりネズミに戻してくれ」といったのだった。

### △大口のカエル

カラスがカエルにいった。

「今晚、森でパーティがあるよ」

カエルは大口を開けて、

「ウワーツ」と叫んだ。

「たくさん食べ物があるそうだ」

「ウワーツ」

「飲み物もそろってる」

「ウワーツ」

「でも、あんまり口の大きな生き物は入れないんだって  
さ」

カエルは急に口をすぼめていった。

「あら、そう。ワニさんが気の毒ねえ」

## △会社のオーム

大会社の事務所に飼われているオームがいた。

強盗団が押し入って、重だった社員がホールドアップでブラツと並ばされた。それにまだ気づかず事務をとっている新入社員に向かってオームが叫んだ。

「おい、君。強盗だぜ。重役会議じゃないよ」

## △四角い卵

小鳥屋にて……。

「オームください」

「この一羽しかいません」

「お幾ら？」

「五十クルゼーロです」

「まあ、オームの値段にしては随分高いのねえ」

「そりゃ奥さん、何しろ世界で一羽の珍しいオームです」

「どんな芸をするの？」

「四角い卵を生むんです」

「まあ、変ってるわねえ……でも、四角い卵なんてあまり興味ないわ。何か喋らないの」

「卵を生むとき喋ります」

「なんて？」

「痛い！って」

### △ネコ

「この魚一匹ください。お幾らですか」

「素晴らしいながらネコが入ってきた。」

「一匹二十クルゼーロだよ」

魚屋は魚を渡しながらホトホト感心していった。

「おどろいたなあ。ちゃんと金を払って魚を持っていくネコなんて、初めてだよ」

ネコは店先で振りむいていった。

「そのネダンじゃ、これが最初で最後だね」

### △ウシ

ウシは草しか食わないのにミルクが白いのはどうしたことだろう。変な動物ではないか？

それに、人が近づいたとき見る目付き！ 苦しみをこらえながらも赦してやるという感じで、こちらが何か悪いことをしたみたいにな気になってしまう。

ブラジルで飼育されている牛の種類はヨーロッパ産とかインド産とかいうけど、全部アメリカから来たにちがいない。

だって、いつも チューインガムを噛んでるみたいだろ。

### △ジョン・デ・バーロ

ジョン・デ・バーロという鳥がいる。茶色い中型の鳥で、いつも番いで行動する。"粘土のジョン"という名の由来は、木の股に粘土で固めた丸い巣をつくるからだ。

ある午後、オスのジョン・デ・バーロが森を飛んでいった。美しい午後だった。森は生命力に溢れ、陽光は皆さんと降りそそぐ。夕方になると光は金の矢のように地上に刺さった。

巣ではメス鳥が夫の帰りが遅いので心配していた。暗くなってオスがやっと戻って来た。

「どうしたの、こんな遅く。心配するじゃありませんか」  
オス鳥は答えた。

「いや、あまり気持の良い夕方だったものだから歩いて帰ってきたんだ」

## △アリとゾウ

あの有名な話……溺れかけたところをゾウに助けられたメスアリが、感謝のしるしとして、「身を委せますわ」といってゾウを当惑させた、というあの話（感謝の押し売りというものだ）。

これにはいろいろな落ちがついているが、いくら誘ってもゾウが応じないので、プライドを傷つけられたメスアリがゾウに向かって「鹿！」と叫んだ、というのもある。（「鹿」は男色家を意味する俗語である）

## △二頭のライオン

首都ブラジリアに来たサーカスから逃げた二頭のライオンがいた。

別れ別れに逃げ、一カ月後に再会すると、一頭は丸々と肥え、一頭は痩せ細っていた。

「おれは市外の荒野に逃げたんだが、ひどい所で五日に一匹の小動物をとるのがやっとだ。お前は どうしてそんなに肥っているのだ」

「ウン、おれは役所の地下にひそんでいて、毎日ひとりずつ役人を喰ってるんだ」

「そんなことして大丈夫か？」

「役人が消えても誰も気づかないんだ。お前も来いよ」

その誘いを断って痩せたライオンは荒野に戻っていった。暫くして、役所でライオンが射殺されたという噂を聞いた。肥ったライオンはうっかりして、役人ではなくコーヒーを運ぶボーイを喰ったのである。

## 「機械仕掛けの神」

“序にかえて”でも触れたが、ブラジルのピアーダ（ジョーク）の特色は第一に政治に関するものが圧倒的に多いことで、毎日のニュースと共に新種のピアーダが出ては口コミでアツという間に拡がる。まことに鋭い内容だが時局ダネだから褪色も早く、数日で消え去る運命にある。従ってこのジョーク集にはその手のものは一つも採っていないが、そういうジョークの活力が巷にあふれているということだけは伝えておきたい。例えばこの章に入れた「屠所の羊」というのは本来はピアーダではなく、与党の横暴に抗議するMDP（野党）総裁のやややケクソ気味に激した今年の演説の一部をそのまま訳して

みたのだ。

ブラジルの国教はカトリックである。信仰の自由は認められているが、ジョークの世界ではやはりカトリック国の面目が現われている。ヴァチカンに対する支持力でもブラジルは極めて有力なのである。

## ☆説教

教会で……。

神父の音がステンドグラスに響いている。

「汝、ものを盗むことなかれ」

信者のひとり、

「アレッ、俺のカサがない。いったいどこで盗られたのかしら？」

神父。

「汝、姦淫することなかれ」

信者。

「アッ、思いだした。あそこへ忘れてきたんだ」

## ☆水の下が問題

キリストが水の上を渡る。使徒たちもそれに続く。キリストが振り返ると最後の聖トメだけが首まで水につかって、必死に後をついてくる。主はペテロにいった。

「行きなさい。行って、あの男に浅瀬を教えてやりなさい」

## ☆願い事

ふたりの男が聖母マリヤ像の前にひざまずいて願い事をしていった。願い事というのは身勝手なものだが、大体、こんな工合だった。

貧しい男「マリヤ様、マリヤ様。何とか百クルゼーロを手に入れられるようにしてください。今夜、食べるものがないのです。お願いします。百クルゼーロです」

金持の男「マリヤ様、先週、株が上がって、どうしていいかわからないほど金が入ってきました。このお金を減らさずにもっとふやしたいのです、私の願いを聞いてください」

貧しい男は負けずに声を張り上げる。

「マリヤ様、マリヤ様、どうか百クルゼーロ……」

金持の男は途中で祈りをやめて、貧しい男に百クルゼーロ渡しながらいった。

「ほら、あんたの百クルゼーロだよ。頼むから、マリヤ様が私の願いをじっくり考えられるように、静かにしてくれないかね」

### ☆オナシスの昇天

ひとりの男が神に召されて天国の門にやって来た。聖ペドロが番人である。

「何しに来た」

「天国へ入れていただきたいと思います」

「お前の名は？」

「アリストテレス」

「アリストテレス・オナシス氏かね」

「そうです」

「すると、君があのある有名なギリシア人の船主かね。飛び切り上等のシャンパンやキャビヤで埋った大宴会をいつも開いたという」

「ええ、そうです」

「それから、世界のファースト・レディだったジャクリー

又を妻にしていた」

「はい」

「それで、噂によると、世界の最高級レストランには専用のテーブルを持っていて、オペラ歌手や女優や、あらゆる有名人と食事をしたそうだね。専用の豪華なヨットも持っていた」

「噂は知りませんが、まあだいたいその通りです」

「入っつていいよ」

聖ペドロは溜息をつきながらいった。

「入っつてもいいが、天国なんかあんたから見ると貧困地帯でしような」

### ☆悪人の善行

ある大金持の老人が死んで天国の門へやって来た。彼は一代で財を築いた人物だが、裏へまわれば強欲非道、とにかく人を踏みにじって生きてきた男の見本だった。

「お前は天国には入れんよ」

当然のように、聖ペドロは宣告したが、そのくらいで引きさがる相手ではない。ああでもない、こうでもない、と食い下がっているうちに、老人はふと思い出して、

「四十年前に足のなえた男に五十センチボ恵んだことが

ある」

聖ペテロが帳面を見ると確かに悪行の山に隠れてその善行も記録されている。

「わしは天国に入る資格がある。私の意志で善をなしたのじゃ」

聖ペドロはほとほと弱ってしまった。確かに善行はしているが、ちっぽけな金額で、悪行と較べたら地球とノミくらい。しかし、善は善ともいう。いちがいに否定できない。

聖ペドロはその記録帳を持って神の前へ行った。

「どうしたらよろしいでしょうか。天国へ入れろ、とうるさく申しておりますが」

神はポケットから五十センチボの銅貨を一枚出して聖ペドロに渡しながらいった。

「これをあの男に返してやりなさい。そして地獄へ行かせなさい」

### ☆機械仕掛けの神

ある悪徳州知事は自己に与えられた権力を最大限に利用して、私腹をこやすことに専念していた。道路工事を

やっても半分はアスファルトに、半分は彼の懐に入るといった按配だが、金のバラまき方も心得ているので失脚しなかった。

そんな彼も天の摂理には勝てず、神に召される日が遂にやってきた。昇天した州知事がまず着いたのはモダンな小ビルである。内部は計器で埋まり、壁一面にメーターが掛っていて、ノロノロ動いているのもあれば、かなりのスピードで回っているものもある。設備は近代化した。天国の番人は聖ペドロと昔から決っている。州知事は恐るおそる聖ペドロに向かって訊ねた。

「えー、ちよっと伺いますが、このメーターは何でしょうか？」

「それは、だな」

甲冑を身にまとった聖ペドロは答えた。

「我が天上界が誇る『悪徳メーター』という新製品だ。地上で犯した悪事の量に応じてメーターのスピードがちがう。針のスピードが速い奴はもちろん地獄行きだ。この機械を使うようになってから、昔のようにいちいち帳簿をひっくり返さずに済むので、天国行きと地獄行きを選り分ける作業がグンとスピードアップした」

「へエ！ 大したものですね」

感心したふりをしながらも、身に覚えのある州知事は

速いスピードで回っているメーターを素早く目で追った。どのメーターの下にも他人の名札がついている。へどうやら地獄行きではなさそうだ。まあ、何といってもわしは知事だからな

ほっと安心した拍子に、彼は大きなクシヤミをした。冷え冷えしたビルなのに扇風機が回っているのだ。余裕を取り戻した彼は持ち前の横柄さをだしていった。

「聖ペドロさん。その扇風機をとめてくれないかね。ここは高度も高いし、扇風機など不要だと思うがな」  
「何をいう！」

聖ペドロは目をむいて怒鳴った。

「これは扇風機ではないぞ。下の名札を見ろ。お前の悪徳メーターじゃないか」

### ☆天国の穴

ある人、善行を積んだかいがあつて、天国に行くことができた。

気候は暑くも寒くもなく、いつも花が咲いている。このような所に入居できた幸せを感謝していたが、そのうちにだんだん退屈になってきた。住人たちも平和なだけで、行いすまして面白くもおかしくもない。

「ああ、退屈だなあ」

ある日のこと、彼はボヤきながらひとり散歩していた。そして、いつもよりずっと遠く、まだ来たことのない場所まで来てしまった。四辺は雑草がおい茂り、禍々しい気配が行手に煙のように立ちのぼっている。

吸い寄せられるようにそこへフラフラと歩いて行くと、  
「危険、地崩れあり」と立札がある。

こわごとと近寄って覗くと、ポツカリと穴が開いていて、遇か下に地獄の様子が眺められた。

話には聞いていても実際に地獄を見るのは初めてである。思わず身をのりだして目をこらすと、ひとりの男が坐っているのが見えた。定めし餓鬼にムチ打たれているかと思いきや、なんとその男はラジオに耳をかたむけながら酒を飲んでいる。その上、横には女さえベツタリと坐っているではないか！

「ヒヤーツ！」

思わず彼は羨望の叫び声をあげて一層身をのりだした。  
「これこれ、そんな所には危いぞ。地獄へ落ちてしま  
う」

振り向くと、いつ来たのか神様が立っていた。

「地獄へ落ちたいくらいですよ」

彼は憤然としていった。

「あちらではラジオを聞いてウイスキーを飲んで、その上、女まで横にくつついてるんですからねえ」

どうも宣伝にごまかされて天国に来てしまったような気がした。

神様は穏やかに答えた。

「あのウイスキーはブラジルの国産品だよ。横にいる女は古女房だ。ラジオの番組は『政府の窓』というやつだ。……どうだ。それでも地獄へ行きたいかね」

「いえいえ、とんでもない」

彼は慌てて後退りして散歩道に戻り始めた。

### ☆お袋の味

悪魔が仲間を夕食に呼んだ。すばらしい味の煮込みシチューだった。食事を終えて仲間たちは口々にその味を賞賛して、またこの料理に呼んでくれと頼んだ。

「それは無理だな」と悪魔はいった。

「お袋ってのはひとりしかいないからな」

## ☆崖のふち

アメリカの経済学者が来て、  
「ブラジルの国家経済は、たとえてみれば崖のふちに立っているようなもので非常に危い」  
と警告した。

それを聞いた商工大臣は笑った。

「たしかに崖のふちに立っているが、あまり長くそこに立っていてもう根が生えてるから心配ないのだ」

## ☆反政府演説

「現在の政府び役人が支配するかぎりブラジルは永久に進歩しないであろう」

「でも、ここ十カ年の統計を見ますと、現実にブラジルは進歩していますが。それについてどうお考えですか？」  
「それは、だな。ブラジルは夜、進歩しているのである。閣僚や役人どもが寝ている間だけ進歩しているのだ」

## ☆挑戦者の秘技

オナラの話というものはどうも品がよくないが、どう

いうものかオナラ較べをしたがるひとがは世界中にいる。去年、そのコンクールの世界選手権大会がリオ・デ・ジャネイロのコパカバーナ海岸で開催された。最後に勝ち抜いたひとりが、前年のチャンピオンに挑戦する。

観衆がかたずをのみ（当然、鼻もおさえて）見守る中を、前年のチャンピオンは静かに浜の中央に進みでて、ブツと一発！

すると、強烈な風圧をうけてコパカバーナの青い海が波立ち、サーフィンの若者たちは転倒し魚まで目を回して浮いてくるといふ騒ぎ……浜辺がどよめく大喝采と歓呼の中をチャンピオンは悠々と席に戻った。

次は挑戦者の番。彼は無造作に立ち上がり、浜の中央へスタスタと歩いて行って、立ち止った。白昼の静寂の中に力む様子もなく二十秒ほど立っていたが、そのまま席へ戻って来た。何の変化もない。

人々はポカンとして見守っていたが、何も起らないでやがて非難の声をごうごうとあげ始めた。

すると挑戦者は椅子から立ち上がり、黙って背後のクルコバード山頂に遠く立っているキリスト像を指した。あのキリストは両手を広げて大西洋に向いて立っているのだが、振り仰いでそれを見て、

「おお！」

「おお！」

と人々のどよめきが波のように湧き上がった。両手を広げていたキリストが、何と、片手で鼻をつまんでいたのだ。

### ☆イヴとヘビ

その神父の説教は面白くて人気があるのだが、とにかく話が太袈裟すぎて真面目に聴く人がいないのが欠点だった。本人もそれは自覚していて、気心の知れたひとりの信者に相談した。

「どうも私は喋っていると興奮して話がオーバーになるくせがある。オーバーになりかけたら合図してくれないかね」

「それじゃ、こうしましょう。神父さんの腰にヒモを巻いておいて、話が大きくなったら私が説教台の後からチョツチョツとヒモを引くというのは」

「それがいい」

早速試みたのだが、話に熟が入っている状態の神父にはそれくらいでは効き目がない。いろいろとテストして、やむを得ず、強く引くと鉄の爪が体に食い込んでひどく

痛い装置をつくった。

神父の説教。

「イヴはへビに誘惑されて……そのへビというのがとてつもなく大きく、アマゾン河くらいもあって」

うしろで信者がひもをちよつと引く。

「うむ、痛い・もうすこし小さくて、ブラジリア市を二巻ミするくらい」

チヨツチヨツ

「痛つ。もつと小さくて、サントス市からサンパウロへ登る高速道路くらい」

そのとき信者の妻がちつとも家に帰らぬ夫を探しに来て、取っ組み合いの大騒ぎ。説教台の神父は痛みに耐えかねて、

「小さい、小さい。そのへビはミミズより小さかった」と叫んだ。

### ☆独裁者の治療

南米の某国の独裁者が陸軍病院の兵士たちを見舞った。

「どこが悪いのかね？」

病床で訊ねると、兵士は、

「ハッ、痔であります」

と答えた。

「よし、患部を出してごらん」

彼はそういいながら綿棒にヨードチンキをつけて塗布してやった。痛さと感謝に顔を真っ赤にして兵士は、「ありがとうございます。これで治るであります」と答えた。

「よし、退院後の君の希望は？」

「ハッ、国家のために命を捧げたく存じます、閣下」  
独裁者はすっかり気をよくして次の病人を見た。やはり痔が悪いので、彼は再び綿棒をヨードチンキに浸して患部に塗りつけてやった。

「君の希望は？」

「国のために働きます」

「よし」

彼は満足してうなずいた。

みんな痔ばかりだ。そうやって最後の患者になった。

「君も痔が悪いのかね」

「いえ、閣下、私は喉にはれものができています」

「どれ、アーンと口をあけてどらん」

彼は綿棒につけたヨードチンキを塗ってやりながら話しかけた。

「これで治るよ」

「ありがとうございます」

「君の希望は？ なにかあるかね」

「ハッ、その……綿棒を換えていたただきたいであります」

### ☆警察結婚

（ブラジルでは、処女を捧げると相手が結婚したくなくとも、警察にうったえれば署長が仲人になって結婚式をあげてくれる。これを「警察結婚」と呼ぶ。日本移民の青年でも、現地の娘に手を出し警察結婚した人がかなりいる。それで、こんなジョーク）

大統領が田舎町で演説をした。彼は愛国心を強調し、「私が祖国に対し、いかなる政策をとったか」と多くの例をあげて長々と演説をぶった。

歓迎パーティのとき、素朴な定年間近かの警察署長が振舞い酒にすっかり酔ってフラフラしながら、

「大統領さん。さっきの演説を聞きますと、あんたは祖国（パトリア・女性形名詞）と結婚しなければならんですな」

「なぜかね？」

いぶかし気に大統領は田舎署長を見返した。

「なぜって……」署長は威張っていった。

「この辺では、相手を傷ものにした男はわしが結婚させることになつとるです」

## ☆人口の増えない町

「警察結婚」を背景にしたジョークをもう一つ。

「ブラジルにおける国内移住」というテーマの研究をしている社会学者が国勢調査表を調べていて、ミナス州の片田舎のある町では人口がここ百年間、ひとりとして増えもしなければ減りもしないことに気づいた。

こんなことは珍しい。彼の研究によると、町の人口というものは必ず、増加するか減少するかのどちらかでないければならない。彼はひどく驚いて、その原因を推測したり試算をしたりしたが、どうしてもわからない。

それで彼は実地調査に出かけた。そしてわかったことは……その町では赤ん坊がひとり生まれると若者がひとり逃げだす、という事実だった。

## ☆映画館の独裁者

南米某国の独裁者……ある日、お忍びで民情視察に街を歩いた。映画館に入ると、ちょうどニュース映画をやっている。広場で演説する自分自身の姿と声が画面一杯に写り、呼びかけている。映画館の観客は独裁者が

写っている間、彼に敬意を表して立ち上がった。

彼は座席に坐ったままニュースを観ていた。すると、後の客が彼の背中を小突いた。

「おい、立たんのか。横着決め込んでいると、あのアホの手下に捕まって銃殺されるぞ」

### ☆屠所の羊

総選挙が近づいたが、今年も社会党（ブラジル野党）が勝てる望みはなかった。選挙対策の党大会で、いかに選挙を戦うか決意を示す演説を党首がした。

彼は叫んだ。

「われわれは羊のようにムザムザ死にはしない。――拍手――。山羊のように大声で鳴いてやる」

### ☆海軍省

中米の某独裁国の役人がボリビアを訪問した。（ボリビアは一八八一年のチリー・ペルー連合軍との戦いに破れ、海岸地帯を失って内陸国となっている。しかし、いまだに海軍省が存続している）

首都ラパスにある立派な海軍省の建物を眺めて、中米

の役人が皮肉をいった。

「貴国は海がないのに海軍省があるんですか。ハハハ」

ボリビアの役人はいんぎんに受け流した。

「おたくと同じですよ。そちらには法はないのに司法省の建物だけはある」

## 「リスボンの死体」

（ブラジルは各国の移民たちが力を合わせて作りあげている国だから、各国人に対するジョークも豊富だし、しかも表面的ではなく真実についているものが多い。それは“序にかえて”で引用した口本人に関する二つのジョークでおわかりいただけると思う。その反面移民としては入ってこなかった国民、例えばイギリス人などに対するジョークはごくステレオタイプのもものが流布している。

特筆すべきはかつての宗主国ポルトガル人に関するもので、ブラジルのジョークではポルトガル人はお人好で好色でちよつと抜けていると役割りが決っていて、名前はマヌエルとジョアキンで代表される。このジョークの世界でのポルトガルとブラジルの関係はあまりむずかしい解釈をする必要はなく、親密さ故のからかいだと思っ

ていい。底流に、かつての宗主国に対する反感とか反抗とか、そういうものはまったくないと断言できる)。

### ◎ふたり乗り自転車

ふたりのポルトガル人がふたり乗りの自転車に乗って遠出をした。急坂をやっと登り切って、先頭のマヌエルが汗をふきながらいった。

「酷い坂だったなあ、登るどころか反対に降りそうだったよ」

後部のジョアキンは、

「だから僕はしつかりブレーキをふんでいたんだ」

### ◎リスボンの死体

「うちの前の路に死体があります」

電話で急報を受けた係官が住所を訊ねるが、リスボン旧市街のややこしい通りで、要領を得ない。

「えっ！　どこの角を曲るんだって？　えっ」

「ちよっと待ってください」

十分ほど電話口に持たされて係官はイライラして怒鳴った。

「遅かったじゃないか、え。何してたんだ」

「分りやすい通りに死体を運んでたんですよ。今度はすぐわかります」

### ◎スープレのハエ

ポルトガルのレストランにて。

「ボーイ！ このスープにはハエが入っているじゃないか！」

「おかしいですねえ。出す前にちゃんと拾ったはずなんですけど」

### ◎ボロ靴

ブラジルに来て二十年……せつせと働いて大金持になったポルトガル移民が、ある夜、全財産の札束を眺めながらしみじみ呟いた。

「この国に来たときは持っているものといったら一足のボロ靴だけだった。……この札束あのボロ靴を買ったら、いったい何足買えるかしら」

## ◎ガス室

ポルトガル軍事裁判。ひとりのスパイが逮捕され、死刑を宣告された。

「絞首刑かね」

と覚悟を決めたスパイが帰りの廊下で訊ねると、

「ガスだ」

と看守は答えた。

死刑執行日、スパイは広い部屋の中央に立たされた。神父の説教があり、

「今から死刑を行う」と所長が宣告した。

部屋の中には十人以上の人間が並んでいる。スパイの心に望みが湧いた。

「こんな広い部屋をガスで充満させることはできないし、したところでみんな道連れだ」

彼がそう思って微笑したとき天井にポツカリ穴が開き、大きなガスボンベが頭上に落ちてきた。

## ◎ピアノニスト

ポルトガル人のピアノニストがいた。ポルトガル人では売れないのでマヌエルスキーとロシヤ風の芸名をつけて、

パリでデビュー・リサイタルを開いて大成功だった。

ところが翌日の新聞の音楽評に「ポルトガル人の天才的ピアニスト」と書いてあったので、驚いてその批評家のところへ行った。

「先生はどうして私がポルトガル人だと見抜いたのでしょうか？」

「それは簡単です。ふつう、ピアニストが舞台に登場すると腰をおろして、椅子をピアノに寄せるものだが、あなたはピアノを引っぱった」

### ◎SF狂

ポルトガル人がバスに乗って公園の時計を見ると十二時ちょうど。暫く走って教会の時計を眺めると、こっちは遅れていて十二時十分前だった。彼は蒼くなって叫んだ。

「大変だ！ 過去へ来るバスに乗ったらしい」

### ◎ベストセラー

ポルトガルの本屋にて。

「評判になっている本をください」

「『ポンペイ最後の日』なんか、よく売れてますよ」

「題からいうと悲劇みたいだなあ。私は悲しいストーリーが嫌いでね。女主人公（ヒロイン）は何で死ぬことになるのかね」

「さあ、よく存じませんが、吹出物かなんかのせいらしいですよ」

### ◎売上げ

ポルトガル人の経営コンサルタント。

「一日に生ビールはどのくらい出るね」

酒場のおやじ。

「二百杯ですよ」

「それなら三百杯分は売れるな」

おやじ、喜んで、

「どうするんですか？」

「泡を多くしたらいい」

### ◎大詩人

ポルトガルの現代詩の最高峰といわれる、キンチノー・ボアベンチラ氏の『街の抽象画』という詩集は、

ニューヨーク市の電話帳をポルトガル語訳にただけだ（というブラジルの噂だ）。

◎もつと悪い

「あんた、毎晩酔っぱらって帰ってくるから、私は近所に恥かしい。前の家のオバアサンなんか窓からそつと覗いて、お喋りの種にしてるのよ」

それを聞いたポルトガル人の夫は、ニヤツと笑って、「心配するな。俺もそれほどバカじゃない。前のババアが覗いているの知っているから、毎晩ちがう男のふりをして家に入るんだ」

◎命中率

ポルトガル人だつて月ロケットを開発したのさ。いつ発射するかと相談して、「やはり、満月の夜の方が命中率がいいだろう」と決めたそうだ。

◎有罪になったポルトガル人

「被告を九十日の禁錮刑に処す」

「裁判長様、それなら冬にしてください。冬の方が日が短い」

### ◎被害

ポルトガル人の経営するスーパーに泥棒が入って商品をごっそり盗んでいった。

「ひどい損害でしたねえ」

「ええ。しかし不幸中の幸いは泥棒が入ったのが昨日でしたからね。二昨日だったら被害額はもっと多かったです。まあ、それだけが慰めです」

「どうして一昨日だったらもっと盗られたのですか？」  
「昨日、年末大売出しで値下げをしたからねえ」

### ◎四角い輪

大昔の頃はポルトガル人は四角い車輪を使っていたそうなの。ゴットン、ゴットンと曳いていて、角がすり減って丸くなってくると、

「おい息子や。輪が大分減ってきたから新しいのと取り換えよう」といったそうなの。

## ◎母の思い出

あの、お人好しでいささか思考サイクルのずれるお馴染のポルトガル人、マヌエル君が今回は水道工事人として登場……。

電話で呼ばれて水道を直しに行くと、主婦が片方の乳房をだして赤ん坊に乳をやっていた。その豊かな白い乳房をマヌエルが目を丸くしてあまり無遠慮に見詰めるので、主婦が怒って平手打ちしてののしると、

「決してそんなつもりで見たんではないです。私は母親がすぐ死んで母の乳房の記憶がないです。この赤ちゃんを見て、幸せだなあと羨ましく思ってたです」

とマヌエルはしよんぼりと、涙さえこぼした。

主婦は思いちがいを謝って、もう一方の空いている乳房を差しだした。

「さあ、あなたもお母さんのオツパイを吸ってごらんなさい」

マヌエルは死ぬほど喜んで、目をつぶって乳房をつかみチュウチエウとミルクを吸い始めた。

……しかし、赤ん坊の吸い方と大人の吸い方はどうしてもちがうのだ。彼女はだんだんヘンな気になってきた。

我慢できなくなつて、マヌエルの頭をギユツと抱きしめていった。

「あんた……なにか、もっと欲しくない。なんでもいつて。そしたらあげるわよ」

マヌエルは満足そうに、

「ええ。これでビスケツトがあればなあ」

### ◎潔癖なイギリス人

ブラジル人がヨーロッパ旅行に行き、ホテルのプールサイドでイギリス人と話している。

「やあ、一杯やりますか」

「サンキユー。一度だけアルコールを口にしたことがありますが、体に合わなくてそれ以後やりません」

暫く沈黙、陽光……。

「ひと泳ぎしますか」

「サンキユー。一度水に入ったことありますが、どうも……それ以後は」

ブラジル人は泳いで戻ってきて、

「一服どうですか」

「サンキユー。一度だけ吸ってみたが、どうも煙草はねえ」

「トランプやりましたよか」

「サンキュー。やったことあるが、あまり面白味が感じられませんので」

そこへ少年が登場。

「私の息子です」

とイギリス人が紹介した。

「立派な息子さんですなあ。その、何ですネ……もちろん、ひとり息子さんでしょうね」

### ◎ワニの涙

アマゾンの奥深く……エメラルドの宝庫が眠っているという伝説に惹かれて、イギリス人の探検家が今日もジャングルの中を進んでいた。

行手に沼がある。アガペウ（ムラサキホテイ）の茂った水辺に倒れている太い樹が、巨大なワニだと気づいて探検家は驚きのあまりノドの奥で低い声を洩らした。実に巨大だった。七メートル以上、十メートルくらい？

写真をとろうとカメラを向けたが、木や草がじゃまであまくファインダーに納まらない。危険を承知しながらも、探検家はソロソロと近づいた。

不思議なことにワニに危害を加える意志はないよう

だった。あきらめ切ったようにじっとしている。探検家はだんだん大胆になってワニのすぐそばまで行ってシャツターを押した。

するとワニの目から一滴の涙がポロリとこぼれ、いかつい甲羅を伝わって水草の葉に落ちた。

「おや、おや」探検家はいった。

「ワニが泣くとはねえ。いったいどうしたことだ」

「さつきふたり喰ったばかりなんだ。腹が一杯でもう喰えない。残念だよ」

### ◎ベニスに死す

水の都ベニスだって、やはり人は生まれ、死ぬ。妻に死なれた男が葬儀屋へ行った。

「すばらしい葬儀にしましょうや。花で埋ったゴンドラに棺を乗せて、そのゴンドラは貴族用の彫刻のある、磨き込んだやつ。そのうしろには楽隊を乗せた美しいゴンドラが続き、それから遺族の方々のゴンドラ、それから……」

葬儀屋の主人が両手を振りながら喋りまくるのを抑えて、

「わたしは貧しいんですよ。とてもそんな豪華なこととは

きない。安いやつで頼みますわ。四等とか五等とかないですか」と男はいった。

「じゃ、四等」

「五等にしてください」

葬儀屋の主人は肩をすぼめていった。

「仕方ないね。じゃ五等にしましょう。でもお客さん、五等ってのは小さなゴンドラ一隻に布の棺がつくだけです。参列者の方々はそのあとを泳いで行く」

### ◎東洋の神秘

ひとりの中国人の妻が浮気をした。夫は相手の住所氏名をつきとめた。浮気相手の男が自分の寢床で目覚めると、布団の上に平行六面体がおいてあった。横に紙片があった。そこには「中国人の復讐」と記されていた。……？

何やら神秘的な呪いだが、現代でそんなもの信じるバカはいない。男はせせら笑って、そのレンガよりやや大きくてズッシリと重い平行六面体の奇妙な物体を、六階のアパートの窓から無造作に投げ棄てた。

……ところが、その物体には細く透明で強いナイロンの糸がついていたのだ。一方の端は浮気男の体のあの部

分に結んであつて、それで……。

### ◎テキサス男

ケチならスコットランド人、大ボラ吹きはテキサス男……という風に小話の世界で役割りが決まっている。ブラジルでもケチはミナス州人、大きな話が好きなのはドイツ系移民が多いリオ・グランデ・ド・スール州なのですが、これはなぜかテキサスの話。

ニューヨークから女友達が遊びに来て、テキサス男が駅へ迎えに行く。

「大きな車ねえ」

「テキサスじゃ、みんなこんな車さ」

「凄い大きなホテルなこと」

「テキサスじゃ普通だ」

「ベッドも大きいわ」

「テキサスだよ、ここは、ワハハハ」

三十分後にベッドの中で、男はしょんぼりしていった。「貴女はテキサスのどこの生まれ？」

## ◎外貨獲得

フランス人がアメリカに行つて、ニューヨークで変な情景を見た。貧しい服の男がレストランドの売店だのの床に散らかっている脂のついた紙くずばかり拾っているのだ。

「何にするんですか？」

「さあ……何でも、これを煮つめて匂いをつけて、フランスへ輸出するって話だなあ。フランスじゃペースト・デ・フオグラと呼んどるそうだ」

アメリカ人がパリに行つて、やはり変な情景を見た。オバさんが道端に落ちてる古ゴムを拾い集めている。

「いったい、何にするんですか？」

「あたしには関係ないけどさ、何でも機械にかけてね、アメリカに輸出してるらしいよ。あちらじゃチューインガムというんだとよ」

## ◎友か敵か

かの名高い西部に出かけて、カスター將軍の砦の歩哨になった男がいた。

太陽のカツと照りつける午後のこと、インデアンの大集団が向かってくるのを発見して、彼は叫んだ。

「インデアンが来ますー」

「友達のグループかね」と砦の中から將軍が訊ねた。

「そうだろう、と思います。みんな一緒に来ますから」

### ◎流刑囚の嘆き

シベリヤの流刑地で三人の労働者がグチをこぼしていた。

「おれは何度か遅れて工場に行ったんだ。それをサボタージュ行為とみなされて囚人になった」

#### 第二の男。

「おれば何度か早く工場へ行ったんだ。スパイ行為とみなされて囚人になった」

#### 第三の男が情なさそうにいった。

「おれは毎日キッチンと時間通りに行ったんだ。そうしたらコミニューンに”典型的なプチブル階級意識の持ち主”という烙印を押されてしまった」

## ◎イギリス気質

イギリス人が予定より早く出張を切り上げて、家へ帰って来た。妻はひどくソワソワしていながら、なぜか極めてサービスがいい。こんなことは長らくなかった。夫は妻の献身的なサービスを受けて、徹夜で楽しい思いをした。翌朝も寝坊してベッドでうつらうつらしている。妻が台所から叫んだ。

「あなた、会社に遅れるわよ。コーヒーにする、それとも果物ジュース？」

「ああ、僕はジュースがいいな」

夫は答えてから、ベッドの下に向かって、

「そこに昨夜からいる紳士はどちらにしますか？」  
と訊ねた。

## ◎悲しきジョーク

ヒロシマ、一九四五年。

あの一瞬の大変化のあと、援護班は生存者の収容に狂奔していた。あるビルの半ば崩れた入口を入り、くまなく室内を探すとトイレの中に一人の男がうずくまり、耳を両手で押えたままじっとしているのに出会った。

引き出してみると別に怪我はしていない。

「いったい、なぜあんな恰好をしてうずくまっていたんですか」

「それが私もよくわからんが、用を済まして水洗の紐を引いたとたん、ドカンと……」

### ◎日本人とユダヤ人

日本人とユダヤ人がビールを飲んでいたら、ハエが日本人のコップに落ちた。日本人は黙って、泡ごとすくってペロリと吞んでしまった。またハエが落ちた。またペロリ。

そのうちにユダヤ人のコップにハエが落ちた。ユダヤ人は指先で泡ごと濡れたハエをすくった。日本人はユダヤ人がどうするか、見守っている。と、ユダヤ人はハエを日本人に突き出して、  
「幾ら払うかね？」といった。

### ◎大停電

ふたりの陽気なブラジル人がニューヨークの高層ホテルの九十九階に部屋をとったが、あいにくの大停電……。

「仕方ない。歩いて上がっていきこう」

さすがにフーフーだが、疲れをまぎらわすためにジョークを披露（疲労？）しながら登っていった。

やっと九十八階について、

「じゃ、僕がとっておきのやつを一つ……」

「もうすぐだから、短いやつな」

「うん、すごく短いんだ。……実は、フロントに鍵を忘れてきた」

### ◎アルプスのガイド

スイスの観光ガイドが団体客を引率してアルプスを登っていく。

「皆さん。この梯子にしっかりとつかまって登ってください。目がくらみますから途中では絶対に下を見ないよ。うに。しかし、不幸にも足を踏み外した方は落ちながら右手をご覧ください。すばらしい眺望ですよ」

### ◎月ロケット

北ベトナムの兵士が仲間に行った。

「またアメリカ人が月に行ったそうだ」

「全員が行けばいいのにな」

## ◎チンピラ

「手をあげろ。御婦人方はトイレに入っていたどころ。紳士方は壁に並んで。支店長、あんたは金庫の鍵を開けるんだ！ さ、急いで」

チンピラはピストルを構えて、自分の演技に酔ったようによどみなく指示する。

「金庫を開けるナンバーを知っているのは、私じゃない。他の係りだが今日はいない」

支店長は蒼ざめながらも必死でそういった。

「チエツ、しょうがねえなあ。でもいいさ、今日は下見に来ただけだから」

外でポルトガル人のギャングのボスが、

「バカ、やめろ！ お前、やりすぎだぞ」

と叫んでいる。

## ◎落ちたふたり

ふたりのポルトガル人が走っていく客船のあとを一所懸命に泳いでいる。

「だから俺はいつたろ、あれは便所の扉じゃないって」

## ◎旅行記

マヌエルが旅行記に読みふけていた。

友達が「面白い？」と訊ねると、彼は上気した顔をあげ、「本当に旅をしてるみたいなきになるなあ」

と答えた。

数日後に友人がマヌエルを見かけると、彼は旅行記のページを後から繰って読んでいる。

「どうして後から前へ読むの？」

「ああ、いま旅行の帰り路なんだ」

## ◎サンドイッチ

“各種サンドイッチ、とりそろえてあります”とレストランの壁に張り紙がある。

客がそれを見て、

「ゾウのサンドイッチ一つ」と注文した。

ガルソンはそれを聞いて奥へ行き、ポルトガル人の主人と相談してテーブルに戻ってきた。

「お客様、残念ですが、注文が一つではゾウは切れないと、主人が申してます」

## ◎洗濯機

マヌエルの女房が電気洗濯機を買いに行つた。

「この機械を使いますと、奥様の仕事が半分になります」

セールスマンの説明を聞いて、彼女、

「それなら二台ください」

## ◎本日開業

まだペンキも乾かぬマヌエル先生の診察室で、服を脱ぎながらふたりの患者が文句をいつている。

「わしはノドがいたいのに、なぜ服を脱がなければいっかんのかね」

「あたしなんか電報配達に來ただけなんですけどねえ」

## ◎ピアノ

家の入口でピアノを動かしているジョアキンを見てマヌエルが手伝つた。暫くして、

「ダメだ、重くてどうしても戸口から出ない」

とジョアキンがいうと、マヌエルはピアノの向うで、

「あれ！ 僕はまた、家の中へ入れるのかと思つていた」

## ◎ 使用法

子だくさんのマヌエルに医者にはコンドームの使用をすすめた。数日後に患者が再びやってきて青い顔をしながらいった。

「先生、あれを服用し始めたら胃の調子が悪いんですが」

## ◎ ビル建築

ブラジルの方が人件費が安いというので、ヨーロッパの業者が建築労務者を募集して、チャーター機でヨーロッパへ送った。エンジンの調子が悪くて、飛行機はハラ砂漠に不時着してしまった。外へ出た労務者たちはたまげて叫んだ。

「どうも給料がよすぎると思った。この砂の山！　これでセメントが着いたら俺たちはつぶされてしまうぜ」

## 「夜明けのドラキュラ」

(ここには今までの分類から落ちこぼれた、いわば”雑”のものを寄せ集めた。雑とはいっても決して不出来ではなく、雑ならではのおもしろさがあふれている。表題の「夜明けのドラキュラ」にしてもほとんど短篇小説と呼んでいいくらいの内容とパンチがある。そのほかにも幾つかかなり長い話がある。読者はこれらを読み終えて、「これをパーティなどで複数の聞き手の注意をそらさず最後まで話すのは大変な話術を必要とするぞ」と感じられるにちがいない。そこなのだ！ポルトガル語はそもそも軽快な言語だが、ブラジル人たちがジョークの一語一語に注意し興味深く聴き手をそらすまいと話す努力は大変なものだ。深刻に頭をかかえたり汗だくになっての熱演だ。だからこそ高らかな哄笑が生まれる。言葉を一つ一つ大事にし、話の表情を発言一つで生き生きと輝やかせる。上手なジョークの語り手たちは生活の芸術家であり、享樂者なのだ。そして、上手な聴き手も)。

## ◎客しだい

洋服屋の店員が奥の主人にいった。

「あのお客さんが茶色い服が気に入ったんですが、洗った  
ら縮むかどうか聞いてます」

「お客さんは着てみたかね」

「ええ」

「それで、大きかったかね、小さかったかね」

「ちよつと大き目の感じですよ」

「それなら、縮むといいなさい」

## ◎作家のサイン

新作を出版した作家がサイン会を開いた。

「妻の誕生日に贈りたい」という男に、作家はサインした  
本を渡しながら、

「奥さんがびっくりするでしょう」

と微笑みかけた。

「ええ、そりゃねえ。彼女はダイヤの指輪をせがんでいた  
んですから」

## ◎交替

狭い交差点で先頭の車がエンコした。運転していた男は悠揚せまらぬ態度でボンネットを開け、後の車は警笛をブウブウ……。そのうちに、一台目の車の運転手が業をにやして降りて来た。

「なあ、おじさん。こうしようじゃないか。あんたとおれが交替する。おれが直してやるから、あんたはおれの車で警笛を鳴らしてくれよ」

## ◎親切の限度

両手のない退役軍人がバーに入って来た。

「ビールをくれ」

「はい」

バーテンはビールを出して注いだ。

「コップを持ちましょうか」

「そうしてくれ」

客は旨そうにビールを飲み干した。

「すまんが、ポケットのハンカチを出してくれ」

「はい」

「それでヒゲについた泡をぬぐってほしい。……そう、そ

う。それからもう一杯」

バーテンはいやな顔もせず客の相手をした。

「ポケットに財布がある。……そう、お釣りはこっちに入れて」

「こうですか」

「そうだ」

「ポケットに戻しましょう」

「ありがとう。ところで便所はどこかね」

それを聞くとバーテンは慌てて、

「いや便所はないんですよ」

といいながら客を押しだした。

### ◎ 下手な料理人

「おい、ガルソン。いったい何だ、このニワトリの丸焼きは。こんな固くてパサパサに焼いちまって、誰が喰えるかね。こいつを持って行って、お前の店のアホな料理人のケツの穴へブチ込んでくれ。それから、俺からよろしくと行ってやってくれ」

「お客さま、少々お待ちください。この焼鳥の前にカツとグラタンを料理人の所へ持っていかなければならないもので……」

## ◎乞食

誰かが扉を叩くので覗いてみると乞食が佇んでいる。主婦の姿を見て乞食はいった。

「マダム。ケーキを少し恵んでくださいませ」

「何ですって！ パンとかスープの余りをくれというのならわかるけど、いきなりケーキとは何ですか」

「実は、今日は私の誕生日です」

## ◎一見正常

小説家が取材で精神病院を見学した。自由に観察するために、特に頼んで案内の人をつけずにひとりで気ままに歩かせて貰った。その小説家は立派なアゴヒゲを生やしている。最初の病室の中には悲しそうな男がいた。

男はいった。

「あなたは見学者ですね。私は見世物じゃないけど、こんな格子の中に閉じ込められているんだから仕方ないな。でも、私は病人じゃないですよ、家族に嫌われましてね……。まあ、こんなことを他人のあなたにいつても仕方ない」

小説家が行きかけると、

「あなたは立派なヒゲを生やしていますね。ちよつと注意しておきますが、各病室の格子にあまり近寄らないほうがいいですよ。おかしなのがいますから」

と男はいった。

小説家は男のあきらめたような話し方に何か胸を打たれる感じがしながら廊下を歩いていった。いろいろな人生がここに閉じ込められていると感じた。

すべての病室を眺めて戻ってくると、あの男と視線が合った。

「ちよつと」と男がいった。

小説家が近づくと男は、格子の間からいきなり腕を伸して彼のヒゲをつかんでぶら下がった。

「ネツ、だから格子に近づくなつて、いったでしょう、ヒビ。ネツ、だから格子に……」

### ◎ 燈台守

燈台守は絶海の孤島に生活しているうちに、社交性を欠くようになるのか……。

凄い大嵐の晩、ヨットが遭難した。ヨットマンは沈着な男だったから、遠くに見える燈台の灯を目ざして操艇し、岩礁でヨットがこわれると荒れ狂う海に飛び込み、

傷だらけになりながらもようやく岸にたどりついた。崖を這い登り、半死半生でようやく燈台守の小屋に来て、扉を叩いた。

窓が開いて、燈台守が仏頂面をだしてそっけなくいった。

「何か用かね、こんな遅く」

遭難者はムツとして答えた。

「いや別に。ただ、灯がついてたもんでね」

### ◎行商人

ホテルの主人がメイドを呼んだ。

「さつき着いたお客さんの部屋へ行って職業を聞いてきてくれ。宿帳に記入するのを忘れていったんだ」

「行商人ですわ」

「おや、どうしてわかる？」

「ちよつと鍵穴から覗いたんですが、入るなりシートで靴を拭いて、洗面所で小便をして、それから窓を開けて外へツバを吐いて、”このしみつたれた町めが”って怒鳴りました」

## ◎インテリの老後

一見インテリ風の、しかし疲れて不健康そうな男が本屋の棚を眺めたあと、店員に訊ねた

「『人生は四十から』というのありますか」

「ええ」気がなさそうに店員はいった。

「本の中だけならね」

## ◎女の足

青年が事故で片足を失った。外科医はすぐ手術して足をつなげば元通りになると判断したが、そうやたらに替りの足がある訳ではない。やっと、女の足を見つけてそれをつないだ。

手術は成功して青年はちゃんと歩いて退院した。暫くして青年が経過を報告に病院に来た。

「どうかね」

「まあまあです」

「まあまあ？　手術は完璧に成功したんだよ」

「ええ、歩行には不自由は感じません。ただ……」

「何だね」

「小便をするとき困るんです。一方の足は立っているし、

一方の足はしやがもうとするんです」

### ◎ 超前衛劇

文化を理解して教養を高めようと努めている中年の夫婦が、評判のいい前衛的な芝居を観に行った。

「どうも難解だね」

「あの黒い服の通行人は人生の絶望を意味するんじゃないかしら」

ふたりでヒソヒソ囁きながら意見を交換していたが、夫は便意をもよおして我慢できなくなった。

「ちよつと中座するが、よく観ておいて筋を教えてください」  
そう囁いて静かに立って廊下に出た。初めての劇場で勝手がわからないが、大体において廊下の突き当りで見当をつけて階段を登ったり降ったり……この辺かと扉を開けると暗い廊下で向うにボンヤリ明りがさしている。どうも変な場所だが、どうにも我慢ができないので、四辺に人がいないのを確かめて思うさま排便をした。

席に戻って夫は妻に囁いた。

「あれから、どうなったかね」

「すぐくわかるようになったわ。登場人物に感情が移るくらい。でも、いま、また急に難解になったの」

「どうしたんだね」

「それが、ひとりの人物がコソコソ登場して四辺をしばらく見回してからズボンを下げて、ウンコを山ほとして退場したの。あれはどういう意味かしら、全然わからない」

### ◎二丁のピストル

第二次大戦中、ブラジルの日本人移民は敵性国民として武器の家宅捜査をうけた。

浮世絵の春画を見た警官が自分のポケットにチヨロツと入れたので抗議をすると、チヨンマゲを指して、「ピストルの絵はいかんだ」

### ◎王と独裁者のちがい

「独裁者と王様のちがいを知っていますか」

と先生が質問すると、生徒が答えた。

「はい。王様はその父のこともみんなが知ってますが、独裁者の父のことは誰も知りません」

### ◎自尊心

ビヤホールに行くと、ビールをコップに注ぎ、暫くす

ると、それをトイレへ持って行ってジャーと空けてくる。それを何回か繰り返して、勘定を払ってビヤホールを出る。ビールは一口も口にしない。あまり変なやり方なので何故かと訊ねると、答えがあった。

「私は中間に介在するだけの存在になりたくない」

### ◎ソリドン (孤独)

糖菓子店に一人の男が入ってきて、誕生日のケーキにうんと”糖菓子をつけて”つくってくれと注文した。コンフェイトというのが金平糖の語源だが、まあいまはどうでもいいこと。ただ、その男は淋しそうで孤独な様子をしていて、とだけ申し添えておいた方がよいだろう。

「一時間後にできます」

「じゃ、その頃とりにくるからね」

一時間たって彼は戻って来た。立派なバースデイ・ケーキができていた。

「ウーム、ちよつと字が淋しいなあ。ここに”千の幸福を！”って色クリームで書き添えてくれよ」

「はい。じゃ二十分ほどしてできます」

二十分後――。男はまだ溝足した様子がなくて、

「なんか、もうちよつと賑やかに飾れないかなあ」

それはまあ、デコレーション・ケーキというくらいで飾り立てるのはいいのだが、男はとても真剣なのだ。

「では、もう三十分お待ちください」

男の注文をすべて聞いてケーキ職人はあらゆる文字やサクランボウや旗で飾った。

「どうぞでしょうか」

「うん。こんどはいい」

淋しそうな男の顔にもやっと微笑が浮かんだ。店主はホツとして、

「では、お包みしましょう」

すると客はいった。

「いや包まなくていい。ここで食べるから」

### ◎どちらの家

ふたりの男がバーで飲んでいた。どうしてふたりでなく、四人とか五人ではいけないかというと、酔っぱらいの話というのはややこしいからだ。ふたりでも説明するのがやっとなら、四人も五人も登場したら話にならない。その証拠にこの話だって随分とややこしい。

「もつと飲もう、こんどはわしが払う」

「ヒヤーツ、次は俺のおごりにしてくれ」

「おい、ジャンジャン持ってこい」

夜も更け、バーの酒の半分も飲み尽して、

「あんた、大分酔つとる。わしが送っていこう」

「いや、大丈夫ですよ。あんたこそ足許が危いはずぜ、ヒクツ」

フラフラ外へ出て、

「わしはこつちだ」

「俺もそつちの方で」

フラフラ……。

「わしはこの角を曲る。じゃさようなら」

「いや、俺もそつち……」

ある家の前で、

「ここが俺の家、な、オツサン。覚いといてくれよ」

「わしの家じゃよ、ここは」

「あんたは酔ってる。まあ、まあ。ちゃんと帰りなさい。

ここは俺の家……」

「困ったねえ。酔ってるのはそつち。ひとの家に入っちゃこまる。ヒクツ」

大騒ぎをしていると、家の中から主婦が出てきて、

「まあ、みっともない。また親子一緒に酔っぱらって帰ってきた」

## ◎タレント

マスコミが発達して、新しいキャラクターの発掘と供給のために、『タレント発掘会社』ができた。

ある日、ひとりのテスト生が訪れた。

「君は何ができるのかね」

「小鳥の真似です」その少年は答えた。

「なに！ 小鳥の真似だって、フン、バカバカしい。そんなもの珍しがる人間はいまどきおらんよ。とつとつと出て行ってくれ」

きわめて不機嫌に社長が怒鳴ると、少年は悲しそうにうなだれて立ち上がり、窓辺へ行き、そのまま飛んでいった。

## ◎寝起きの悪い乗客

ベロオリゾンテ行きの夜行列車にて……。

「車掌さん、途中のジュイズ駅で起してください。大事な用があるので、絶対忘れず起してくださいよ。十クルゼーロ、チップにとつてください。私はぐっすり寝てしまうちちなので、本気で起してね。……心配だな、二十渡しておこう。自分でもわかってるんだけど、とにかく

寝起きが悪いんだ。なんだかんだというかもしれないが、怒らないで頼みますよ。三十あげます。とにかくあなたが悪口をいうかもしれない。ひよつとすると、あなたのお袋の悪口までいうかもしれない。四十渡しておこう。絶対に怒らんでね。もしかすると、自分はここで降りる必要などないとさえいいうだろうけど、あなたは構わずに、私の荷物をホームにおろしてね。五十クルゼー口渡しておきましょう。頼みますよ。私は『十二号』の寝台に寝てますが、とにかく絶対にジュイズ駅で降りなければならぬ用があるのでね」

「はい、お客さん。そうします」

五十クルゼー口受けとりながら車掌は答えた。客は寝台車に戻って十二号のベッドに這入り込んで、すぐ寝てしまった。

……翌朝、その客が目覚めたとき、陽は高くのぼり、汽車は終着のベロオリゾンテ駅に停ったところだった。客は蒼くなって車掌の所へすっ飛んでいって怒鳴り始めた。「このカナリヤ野郎、バカ、アホウ！ 貴様は淫売の子か、クソツタレ」

車掌はそれを適当に受け流している。通りがかつた食堂車のボーイが、

「こんなひどい悪口、よく平気で聞いていただけますねえ」  
呆れたようにいうと、車掌はいった。

「なに、この人のはまだそれほどじゃない。夜中にジュイ  
ゾ駅で荷物と一緒にホームに放り出した『十一号』の客の  
悪口は酷かったぜ」

### ◎口から出まかせ

“アフリカの猛獣狩り”などといいたすと一昔前の話みたいだが、今でも世界中のハンターの夢らしい。ブラジルの月刊狩猟誌も三分の一くらいはアフリカの記事が載っている。

大金を投じてアフリカへ遠征し、帰国すると友人たちを集めて大ボラを吹く……というのが小話に登場するハンターの姿だが、わが友人のジョアキンもそのひとり。

友人たちを夕食に招持して、さつきからジョアキンが喋っている。

「それはすばらしいオスのライオンだった。ところが従者も離れていて俺ひとり。とっさにライフルを射ったが、弾が入っていないんだ。もう駄目だと思ったが、ドタン場になるとクソ度胸が出るものだね。怖いという意識すらなく俺は向かってくるライオンにしがみついた。奴が

上になり俺が下になる。俺が上になり奴が下になる。俺は夢中で奴に噛みついた。いいかい、ライオンにかみついたんだぜ。ところがタテガミの多いライオンで俺の口の中は髪の毛で一杯になった。……」

そのとき電話が掛ってジョアキンは中座した。暫くして席に戻り、「どこまで話したかね」といった。

「口の中が髪で一杯になり」

「ああ、そうだ。口を髪で一杯にしながらも、俺はそのアフリカ女に夢中で抱きついた」

「……？」

### ◎不眠症

「不眠症ですか」と医者はいった。

「経済的な問題悩んでいるのです」

「ああ、それが一番いけない」

と医者はいった。

「もっと人生の色々と楽しいことを考えて、やっていくようにしたらいいのです。ノイローゼに薬など不要という主義でしてな、私は。先日も歯医者に莫大な借金があるという患者が来ましたが、聞いてみると確かにひどい借金でしたが、いってやったんですよ。借金などは払う側

ではなく、受けとる方の問題だとね、返そうと焦ってクヨクヨするな、と。その患者は今ではすっかり落着いて、よく眠られるようになりましたよ」

「ええ……」と不眠症の患者はいった。

「私とその歯医者なんです」

### ◎すごいホラ

この町の床屋ときたら、多分、世界一の大ボラ吹きだろうな。こないだ客が来て顔をあたりながら、

「おれはイタリアから船で来たんだが、途中で海に落ちた奴がいてな。そいつは船のあとを泳いで大西洋を渡ってリオに着いたんだ。すごい奴もいるもんだぜ」

というと、床屋のオヤジはシャボンをなすりつけながら、

「そいつの顔を覚えてませんかね」といったものだ。

「知らんねえ」

すると床屋は客の顔をのぞき込んで、

「あんたはその当人と話しているんですよ」

### ◎大酒飲み

二人の大酒飲みが橋の上をフラフラ歩いていたが、ひ

とりが川に落ちた。人々が救助にかけつけたが助けあげたときはもう溺死していた。

残された大酒飲みのひとりごと。

「死んじまったか……。無理もねえや、あいつが水を飲んだのは、生まれて初めてだろうからな」

### ◎誤診？

医者が患者の胸に手を当てて、

「フム、あなたの胸にあるしこりは、一週間できれいに取ってあげます」

「そ、それは困ります。これは財布です」

### ◎買物

ニューヨークに来たブラジル人、ウインドー・シヨツピングを楽しんでいたが、店員に、

「ドウ・ユー・ライク・イット？」と訊ねられたら、

「ライクはライクよ。だけどノー・マネー」

と答えた。

英語が苦手なのはどこも似てるようでして。

## ◎ 血が流れる夜

誰もその城を買おうとしない。ドラキュラが棲むという噂だったから。ところがあるご婦人が買って、住むことにした。最初の夜……扉がギイーと開いて黒い影が入ってきた。

「誰？」

「ドラキュラ！」

「何しに来たの」

「血を吸いに」

「ああ、それなら、あと二十五日して来なさいな」

## ◎ ガソリン値上げ

「どんどんガソリンの値上がりが酷くて困るなあ。もう払い切れないよ」

と自家用のドライバー。

「僕は全然困らないよ。一回に十クルゼーロしか入れないことにしているんだ」

## ◎ 大きな獲物

猟銃を買ったがまだ獲物のない初心者に友人が易しいコツを教えた。

「穴を見つけてね、その前に腹這いになってワツと叫ぶ。動物が飛びだすから引金を引けば、百発百中だよ」

教わった通りに小さな穴を見つけてワツと叫ぶと、ウサギが飛びだした。

「ズドン！」

ウサギがバタツと転がる。なるほど簡単なものだと納得して、そのやり方でだんだん大きな獣をとるようになった。

ある日、いままでで一番大きな穴の前に腹這いになってワツと叫ぶと……走り出てきたのは機関車だった。

◎待つ……

道の真ん中で、深夜（いや、もう夜明けに近い頃）膝をつき、お尻を上げ、耳を地面につけている男がいる。通りがかったもうひとりの男が何を聴いているのかと不審に思い、同じように地面に耳をつけた。暫くして、「何も聞えないじゃないか」というと、相手の男。

「そうなんだよ。夕方からこうやっているが、何も聞えないんだ」

## ◎女の買物

女性ドライバー。ちよつと小粋な小型車に乗り、髪はセットしかけでスカーフを巻いて、唇だけさつとルージュを塗って、買物へ行く途中……。

ゆつくり車を走らせてきたが、信号で停ったきり動かない。赤・黄・緑……赤・黄・緑。

交通巡査が見かねてやってきた。

「奥さん、私は三つしか手持ちの色はないんですよ。早くどれか選んでください」

## ◎良心的な工場

経口避妊薬ピルの工場を見学した。近代的な設備で衛生的な生産がなされている。

「多すぎる地球人口を制限する重要な使命をはたしている」という工場長の説明にうなずきながら進むと、別館は保育園になっていた。たくさんの子供たちが保母と遊んでいる。

見学者は目を丸くした。

「おやまあ、何となく皆さんの子供でしょう。ピルの会社なのに、貴社の従業員は子だくさんですなあ」

「これは従業員たちの子供ではありません」

と工場長は答えた。

「御使用者の苦情受付課でして……」

### ◎酔っぱらいの会話

「おや、フランシスコさん、どうですか」

「おれはフランシスコじゃねえ。今もそうじゃないし、前もそうじゃねえ」

「だって、以前、パリでお会いしたでしょう」

「おれはパリなんて、行ったことねえ」

「ああ、そうでした。私もまだパリに行ったことないですものね」

### ◎鉄路

ふたりの酔っぱらいが鉄道線路を歩いていた。あつちへフラフラ、こつちへフラフラ。今にもとまりそうにだらだらと……。

「何て長い階段だ。おまけに歩きにくい」

「やけに低い手すりだなあ」

## ◎ひどい酔い方

ふたりの酔っぱらい、グデングデンに酔ってバーを出て、車で農場までの暗い帰路を飛ばしていた。対向車こそない荒野の一本道だが、メーターは百キロ……百二十キロ……とぐんぐん上がる。

百五十キロになったとき、ついにひとりが堪えきれずに叫んだ。

「おい、ひどいスピードだ。おれは嫌だ。こわいよ。飛びおりするぞ」

「とんでもない。運転してるのはお前じゃないか！」

## ◎みんなが変な日

とても暑い日が続き、誰だって頭が少しおかしくなりそうな午後、医者の中へ女性から電話がかかってきた。

「先生、うちの主人の様子が変です」

「どうしました」

「自分を競馬の馬だと思い込んで、その辺を駆け回ってます」

「それはいけませんな」

医者は思わず釣り込まれて、こういった。

「すぐ病院へ駆けつけてください」

……この小話はこれで終わってもいいのだが、御婦人が返事をしたことにしてもいい。

彼女も医者に負けずに叫んだ。

「すぐ参りますわ。主人の背中に鞍をつけるだけでいいんですの」

### ◎深く深く酔う

酔っぱらいの話だが、落ちが三つある話。

深夜、一軒の家の扉をこじ開けようとしている酔っぱらいを警官が見とがめて、

「なにしてるんだね」

「戸を開けてるんですよ」

「葉巻を鍵穴に突っ込んで、開く訳がない」

「えっ、……そうすると、わしは鍵を吸っちゃったのかな」

でも、警官の手助けでどうやら戸が開いて、ふたりは中に入りました。

「台所にガスレンジと青いテーブルがありますぜ。絶対

に、ここはわしの家なんだから」

警官は台所を覗いていう通りなので安心して出て行くうとすると、酔っぱらいは案外としつこい。

「あつちの書斎にはペローバ材の机があります。ちゃんと見てくれ」

その部屋を覗くと机がある。

「もうわかった」

「いや、まだ。ほら、ここはわしの寝室だ。あのベッドがわしのベッド。その上に寝てる女はわしの女房。その横に寝てる男がいるな……あれはわしだ」

警官が帰り、酔っぱらいは上衣を脱いでベッドにもぐり込んだ。勢よく毛布を引きずり上げると足が出る。

その足が六本出ているので、酔っぱらいは目をこすつて、

「オヤオヤ」

もう一度目をこすると二本の足がスツと引っ込んだ。

「そうか。わしの足が重なって見えただな。わしも今夜は大分酔つとるな」

## ◎二杯の酒

（同じジョークでも、それぞれの国によってちがう生き方をするようだ。これから話すジョークも世界中に流布しているが、ブラジルでは初老以上の年の人だけが口にするジョーク）

……ふたりの男がいつも一緒に飲んでいたが、ひとり  
は戦争に行くことになった。出征する男は友人に「俺が  
戦争に行っても、毎日あの酒場へ行つて同じように二杯  
の酒を注文してくれ」と頼んだ。そして、別れた。

ある日のこと、友人は酒場へ行つて、

「今日は一杯だけでいい」

バーテンが目伏せて、

「……あの人が戦死されたのですね」

と沈痛な表情でいうと、

「いや、私が医者に酒をやめろといわれた」

……ブラジルは第二次大戦でイタリヤ戦線に参加したきり  
で、以後戦争はしていないので、いかにも自分たちのこととしてこのジョークを口にするのは一九二五年以前に生まれた人ばかり。同じジョークを、昨日の出来事のようにもつと若い人たちが喋っている国ももちろんあるだろう。

## ◎夜明けのドラキュラ

ドラキュラ家の血筋は今日まで連綿と続いているが、昔ほど華やかな、人の心を恐怖でしめつける存在でなくなったのは事実である。教会の鐘が十二時を打つのを合図に、一見凶暴でありながらよく観察すると実にデリケートな手つきで窓を押し開け、背後から風に吹かれるのか自分で風を巻き起こすのか、とにかく不気味なカッコよさで黒マントをはためかせて、ベッドに眠る美しき処女に忍び寄る。

とまあ、そういつた芸術的悪事が実にやりにくくなった。最近は高層アパートが多く窓が簡単に開かないし、十二時になってもテレビやレコードの音がする。苦労して忍び込んでも肝心のドラムスメがまだディスクから帰っていないかったりする。そのうえ、ドラキュラに最上の血を提供するあの“処女”というのが、最近ではいるのかいないのか？ とにかく見つけるのがすごくむずかしくなった。

…：もうそろそろ夜明けだった。東の空が明るんでいく。冷たい風に白い息を吐きながら針金のように痩せ細

り、空腹のためにフラフラして街路をさ迷っているのは、現代のわがドラキュラ伯だった。

彼は野良犬か乞食のようにゴミが入ったポリバケツをあさっていた。いったい、ドラキュラがなぜそんな真似をするのか？ 背後からそっと近づいてみると、彼はゴミバケツを一心にひっくり返しながら呟いていた。「……せめて、生理用品の脱脂綿の使用済みでも見つければ、あれで朝のスープくらいは飲めるんだがねえ」

### ◎渚にて

（ハヤシの木がヒヨロヒヨロと生えている無人島へ男と女が漂着する〜という小咄はそれこそゴマンとあつて読者も聞きあきているかもしれないけど、この話はちよつとヒネッてあつて、やはりこのジョーク集の最後で話すだけの価値はあるだろう）

主人公の男の名はハッキリしないが、こんな、トボけたお人好しはたいていマヌエルという名だから、ここでもマヌエルにしよう。その男は船員で、ポルトガル人は航海好きだからマヌエルというポルトガル名が似合うというものだ。

マヌエルが乗組んだ船はおそろしい大嵐に遭遇し、彼は船長の命令でまず女性客をボートに移していた。ところが波と風で索綱がプツリと切れ、六人の女性とともにマヌエルはボートごと荒海に投げだされ、あつという間に本船から遠ざかり、嵐が収まった数日後にこうやってヤシがヒヨロヒヨロ生えた淋しい無人島へたどりついた、というわけだ。

ヤシの葉で屋根をふいて小屋をつくり、食物はヤシの実と魚……という風に一応生存の目安がつくと、男と女だから次の問題はセックスということになる。男ひとりに女六人、マヌエルは小躍りして喜んだが、それもごく始めのうちだけ。力関係が逆だからたちまち女たちのドレイになって奉仕し、一日ひとりずつのお相手を勤め、辛うじて日曜日だけ休ませていただく。一週六日労働、日曜だけが唯一の楽しみで骨休めという都会のサラリーマンのような生活になった。

ある日のこと、マヌエルは疲れた体を砂浜に休ませながらボンヤリと青い沖を眺めていた。魚とヤシの実だけでは、六人の女の相手は無理なのだ。

マヌエルのボンヤリした目に、水平線の黒点が映った。オヤ、彼は立上って小手をかざした。やがて黒点は

ボートの形をとり、だんだん近づいてくるではないか。たったひとりの人間が乗って櫂をこいでいる。男か女か？ 漕ぎ手は明らかにこの島を目ざしてくる。

ボートが近づくと、乗っているのは頑丈な体つきの若い男だった。

マヌエルは飛び上がって喜んだ。これでもっと休みがとれるわけだ。彼は待ちきれず海に飛び込みボートを引いてきた。

「よく来た、よく来た」

この島には女が六人もいて俺は日曜しか休めない、と彼は早速グチをこぼした。

すると逞しい体格の若い男は、不意に、女のように身をくねらせてマヌエルをキラキラ見つめながらいった。

「よかったわ、一日でも貴方の体が空いていて。ホホホ」

## あとがき

この本はサンパウロ大学教授の斎藤広志博士の教示で書いた部分が多い。「序にかえて」も博士に執筆いただく予定だったが、多忙のため果せなかった。これを書いている今頃、博士はアマゾン移民五十年祭で、アマゾン河口のベレン市で講演しているはずである。

私どもはサンパウロ人文科学研究所のメンバーでもあるが、午後六時すぎには研究所のソファアに坐って酒をのみながら、とっておきのブラジリアン・ジョークを出し合って「ヒヒヒ……」と笑っているのである。だから、この本は斎藤博士や私だけでなく、人文研のメンバーの共著といえないこともない。もともと、編著者名をサンパウロの人文研とすると、研究を支えるために賛助会費を払ってくれている真面目な人々が「いったい、何の研究をしとるのかいな」とおこるといけないので、私個人の名にした。

ブラジルには約七十五万人の日系人がいる。海外では最大の日系人集団のある国で、そのせいもあってブラジル人は日本に関心を持っている。しかし、日本人のブラジルに対する知識や関心はまだまだ低い。この本を引受

けたのも、さまざまな角度からブラジルを知って欲しかったからである。日本人がブラジルを知らない理由の一つは、地理的に最も遠い国だということもあるだろう。雨が降り続いてサンパウロ市の道路に大穴があくと、「注意！日本行き近道あり」と立て札が立つくらいで、本当に地球の反対側である。

しかし、さまざまな交流は思いのほかに進んでいて、例えばあなたが食べているソバの何割かはブラジル製のはずである。遠い国でありながら、意外とブラジルはあなたのソバなのだ。えっ！どうりでこのソバはコーヒー臭くてまずいって。そんなはずはないですよ。それは悪いジョークだなあ。

一九七九年一〇月 サンパウロにて

## 編著者紹介

醍醐麻沙夫（だいご まさお）

1935年横浜市に生まれる。学習院大学文学部卒業。ブラジルに渡り各種の職業を経たあと、作家活動に入る。第45回「オール讃物」新人賞受賞。

主な著書「森の夢」「夜の標的」など。主でない著書「スーパーマンHの冒険」など。活字にならない著書、多数。

発行所 株式会社 実業の日本社

ブラジル・シヨーク集

昭和55年1月10日 初版第1刷発行

編著者 醍醐麻沙夫

発行者 増田義和